
架空勇者戦記アセトアルデヒド

スマッシュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

架空勇者戦記アセトアルデヒド

【Nコード】

N1699F

【作者名】

スマッシュ

【あらすじ】

「スカートめくりで繋がる絆」「嫌だ……。そんなキャッチコピー嫌だ……」生死をかけた戦闘よりも、別の戦闘に力を入れている気がしなくもない不思議ファンタジー。

第一話：出会い

魔王がいた。

魔王は結構悪いやつだった。

他人より相当強烈な魔法を使えるからって好き勝手しやがるのだ。

他人より優秀なんだから、魔法を使う仕事を全部やってくれ、思ったりもする。

そういうわけで、この俺、ジカルマは勇者をしているのだ。

理由は俺も他人よりかは魔法が得意だから。

ちなみにそういう人間じゃないと勇者になれなかったりする。

なので、俺は割と優秀なのだ。えへん。

そして、そんな俺は現在仲間を探している最中。

でも同じく勇者やつてる連中はプライドが高いのか、一人で行動する。

もしかしたら他人と話すのが苦手なのかもしれない。

まあ、他人より優れているから勇者やつてるのに他人の力を頼りたくないわな。

しかし、それは間違っている。勇者として間違っているのだ。

なぜならば――

男1人パーティじゃハーレムとは言えないからだ！！

ずびしりっ（効果音）

そういうわけで、街中で勇者を探す。

勇者と一般人の見極めは容易である。

大体の勇者が自己主張の激しいやつなので変な格好をしているのだ。変な格好をするとカッコイイと思っちゃう病なのである。

そういうわけで変な格好をしている少女を発見。

なんかひらひらしているものを履いている。

見たことのない服装だ。

なんかものすごく清楚な感じがする服だ。

俺は魔法で足音を消して背後から近寄る。

俺の魔法は大体こんな感じの使い方をする。

魔法を使えば秒速10mで動くことだってできるのだ。

少し歩くスピードを速めつつ少女の背後に忍び寄る。

姿勢を低くし、腕に魔力を込め、タイミングを計る。

そして、ここだ、と思ったと同時に魔力によって加速した高速の腕がひらひらしたそれを掴み、一瞬にしてめくり上げる！

そこには白い布が！

なんていうことだ！これは大変なことだ！どうしてってそりゃあもう、こんな簡単にこのような神々しい物体を見ることができると！

とりあえず、ひらひらをめくり上がった状態にしておくために魔法で風を発生させる。
じっくり眺める。

俺は腕を動かしてからそれまでを1秒足らずでやってみせた。

これが俺の訓練の成果である。

「これだけのためにR15に設定しましたー！ーっ！！（↑悲鳴）

」

よくわからない悲鳴が数秒のタイムラグと共に発生。

少女は俺から離れ、顔を真っ赤にしながと言った。

「あんた……勇者すか」

「その通り。勇者……つまり、勇気のある者さ」

街中で魔法を駆使して見知らぬ人に襲いかかるあたり。

「その勇気をたたえて、二度と人前に顔を出せなくしてやるですよ」

そう言つて少女は手をこちらに向けた。
それと同時に電流が俺の腕に放たれる。
しまった、回避ができそうにない。

「——っ!」

腕にちょっとした痛み。

そして神経がそれを電気信号として手に伝え、手が勝手に動く。
ぴくん。

……ちよつとだけ。

「意味ねー!!」

なのでもう一回ひらひらをめくつた。
そしてそのひらひらの中に潜り込む。
視界の多くが白を捉える。

と同時に膝が俺の顔面に直撃して、俺は吹っ飛ぶ。
結構なダメージ。痛い。

「えーっと、まあ、そのなんだ。それはともかくとしてだね」

俺は立ち上がつて埃を払いながら本題へ話を移す。

「いや、ともかくて……。あんた加害者ですし」

「君もどうやら勇者のようだね」

「スカートはめくらんですが、まあ勇者です」

あのひらひらはスカートというのか。
しかし、勇者にしては魔力が低い気がする。

とすると……？

「そうか……。君は本当のところ勇者ではないんだね？」

「——っ!？」

「そして、君には魔王を倒して英雄にならなければならない理由があるわけだ」

「そ、そんなストーリー後半になって明かされるようなことを今ここでっ!？」

この少女は混乱するとよくわからないことを口走るようだ。

しかし、俺には確信がある。

こういうパターンだと、俺の経験上どういう理由かはなんとなく想像がつく。

「まあ、別に深い理由なんてないんですけどねー」

「ずばり君は英雄になって得た富で救わないといけない人がいるわけだな」

……。

……………。

しばらくの間、無言。

「ないのかよっ!！」

俺は叫んだ。

「でもいいや、とにかく女の子なんだから仲間になってよ」

「イエローピーポー呼ぶぞこの野郎」

笑顔で言われた。

イエローピーポーってなんだろう？新手的モンスター？

「でもでもさ、ほら、そんな魔法だと仲間が必要じゃない？」

「まあ、そうなんですけどねー」

「そうだろう。そうでしょう。そうですとも。そうであるべきです」
「でもこんな野郎の仲間は嫌です」

魔法弱いくせに口は強い。

腹が立ったのもう一度スカートをめくる。

今度はめくると同時にノックバックして反撃を避ける。

「そういうわけで、君の名前は？」

「嫌だ……。スカートめくりでテンポ取る会話なんて嫌だ……」

泣いていた。

「俺はジカルマっていうんだ。魔法で自分の体を強化するのが得意」

とりあえず話を進める。

これからよろしくな、と言いつつ友好の証としてスカートをめくる。
これで僕達仲間だね。

「んなわけあるかーっ！」

少女はそう叫んで手当たり次第に魔法を放つ。

しかし炎は燃えず水は勢いがなく電気はそれほど意味がない。
やがて彼女は降伏した。

「スカートめくりで繋がる絆」

「嫌だ……。そんなキャッチコピー嫌だ……」

「で、名前は」

「名前……ですか」

少女は名乗った。

「えつとですね。私はユミ言います。ジョシコーサーやってるっす」

ジョシコーサー？

知らない職業だ。

どうやら、思ったよりこの世は広いようだ。

きつと旅して魔王を倒してもまだ知らない世界の一部分があったりするに違いない。

そついうわけで、俺と彼女は仲間になった。

一緒に旅をする記念にスカートをめくっておいた。殴られた。

第二話：旅立ち

誰もが拒否をした。

深く関わり合いたくないというような目をしていた。

魔王も勇者も孤立を望むのは、きっと一人で生きていけると信じているからなのだろう。

仲間は、増えなかった。

「やっぱ、女性だけでなく男性にも声をかけた方がいいんじゃないんすかねー」

「いや、まあ、そうなんだけど」

そうなんだけどさ。

「その方針でもう十日くらい歩いているじゃないか……」

そうなのだ。

全くもって誰も仲間になってくれない。

性別、年齢、住所に国籍その他もろもろ問わず声をかけているのだが。

誰も関わりを持とうとしない。

そこを見抜いて、ユミはとうとう断ってきた相手に罵詈雑言を投げつけるまでになった。

相手はそれを聞こえないふりして立ち去るのであるが。

十日間同じ場所に滞在しているせいもあるだろう。

けれども、下手に外へ出てモンスターに振り返りにされても困るのである。

「性格が暗ければ暗いほど魔力が強いかそういうことだったりー」

「それは困る。見ず知らずの他人に話しかけるのが苦手なシャイボーイである俺にとってきつすぎる」

「……」

冷たい視線を送られる。

「いやいやいや！本当だって！」

「スカートめくり」

「ああ、あれはなんか恥ずかしさより欲望の方が——」

ドスッ

欲望を体で持つて体現する優れものな器官が蹴り上げられた音である。

「だって、なんか他の人とは違う感じがしたんだモン……」

本格的に痛みが体中を駆け巡る前に。

俺は言いたいことを言った。

倒れる。

悶絶。

「それが彼の最期の言葉となった——」

そう言っただけで彼女は去って行った。

一人取り残された俺を、通り過ぎる人々がちらりと見ては見なかったことにして去っていく。

人間は、
世界は、
孤独だ。

股間を押さえながら俺はそんなことを思っていた。

やがて復活。そして合流。

「げー、まだ生きてやがったー」

不満そうだ。

ならば仕方がない。

俺は素早く姿勢を低くして手でユミのスカートの裾を掴み、思いきりめくる。

「……」

「……」

沈黙。

彼女の手には金槌が握られていた。

「金槌を買ってみました」

「はい」

「これであなたを殴ろうと思います」

「ふっ」

俺は鼻で笑った。

金槌で？殴る？

ばかばかしい。

そもそも俺は勇者だ。訓練されているのだ。武装した人間の攻撃と言えども武器は所詮金槌であって、そのような短い武器では俺を捉えることなど月を掴もうとするかのごとく不可能であり、仮に当た

つたとしても拳で太陽を砕こうとすること並に無意味な攻撃でしかないの――

ごいんっ

俺のマジカルスティック（伸縮可能）に直撃していた。

「そっぴや、最近、民家やら宿屋やらが一晩のうちに消えたりすることがあるそーですよ。魔女がうんたらと言っていました。絶対何かのイベントフラグだと思っんでここで話させていただきますが」

「……」

重要そんな話をこんな時にしないでください。

俺は地面に体を密着させている。というより、立てない。

……フラグ？

なんだそれ。

「とりあえずその魔女を味方につけられたら心強いのではないかと。あるいは倒せば経験値ががっばとか。そういうわけで派手な行動をしてそいつをおびき寄せるといっのはどうですかねー」

「……」

「おや？」

喋る余裕がなかった。

意識も朦朧としてた。

「で、その魔女に遭遇するとして」

復活。

攻撃の影響で機能が破損していないか不安である。

「どうやって戦うの？」

「戦ったら負けるに決まってるじゃないですかー」

問題点多し。

「まー、別にそんなことはどうでもいいですよ」

「なぜに」

「とりあえず、何らかのイベントを発生させて話を進行させるなり
何かの情報を手に入れるなりしないとならんのですよ」

「……君は時々わけわからんことを言う」

「あるいは、外に出て別の場所に行くしかないです」

「……」

とんでもないことを言ってきた。

外に出るだつて!?

とんでもない。

モンスターと遭遇したらどうするんだ。

死んじゃうぞ。痛いぞ。辛いんだぞ。

「気になったんですが」

「……なに」

「モンスターなんて出てくるんですかね？」

「はい？」

「いやー、恥ずかしながら長らく旅をしていますが一度たりとも遭遇したことがないのでー」

なんてやつだ。

「そりゃもう頻繁に遭遇するという話だ。しかもそのモンスター、
攻撃が効かないのなんの。遭遇したが最期だつて話が主流。だから

勇者といっても外に出ることはほぼ無いね。わざわざ命を落としないでかけるほど馬鹿じゃないというか、死んじやったら魔王だって倒せないしさ。そういうわけだから外に出ることは勇者界では最も愚かな行為だと――」

「……」

「どした？」

「外に出ない勇者に仲間なんて必要なんでしょうか」

……あ。

「そもそも外に出ないなんて半ばひきこもり同然の勇者じゃないっすか」

「勇者と呼ぶに値するかどうかも怪しいな」

「自分ダイスキーが多いというかなんというか、それで勇者かよ！
って感じです」

「ああ、まったくだ」

「というわけで外に出ます」

良い様に誘導された！？
このままでは命の危機だ。
逃げよう。

「そうか……達者でな」

「さあ行きましょうー」

「いやだー！死んじやうー！」

首を掴まれて引きずられていく俺の図。

別に外に出なくなっただっていいじゃないか。

本当に魔王を倒すつもりか？彼女は。

俺は面倒な人間を仲間にしてしまったなと思った。

第三話：魔女

がくがく。

ぶるぶる。

びくびく。

「なんでそこまで怯えてるんすか」

「……怖いんだもん」

モンスター怖い。

「せめて、どういうやつなのかわかれば対処できるのに」

知的なことを言ってみる。

声が震えて強がりくさかった。

「遭遇すればわかるのでは」

「……わかる頃には死んでるだろ、それ」

「大丈夫です」

「え？」

もしかしてもしかして私が守ってくれちゃったりするものなのか？

「少なくとも私は生き残るように善処しますゆえ」

「せめて二人ともにしてくれ！」

「そこまでだ」

男の低い声が場を一気に冷却させた。

俺たどが男の方を振り向くと、派手な長さが無いながら、十分に凶器としての役割を果たしそうな刃物を握っていることが確認できた。

「お前たちは俺が処分する」

太い刀身から発せられる鈍い光が俺達を威嚇して、男の声を一層気迫のあるものとする。

視線は俺たちの体を完全に捉えている。こちらの動きに即座に反応できるだろう。

相手の足の速さはどれくらいだろう。

不意打ちをしてこないということは、逃がさない自信があるのだろうか。

……つまり、逃げる事が可能、と判断するには難しい。

「仲間になりませんか？」

ユミの陽気な声が場をかき乱した。

アホか。

その声は相手の行動の引き金になる。

弾けたようにこちらへ向かってくる。

自分の体に魔法をかけ、ユミの前に飛び出す。
素手だ。

せめて、金槌を俺が持つていれば、と思う。

大きく踏み出して、相手の攻撃を誘う。

刃物を振るったところで身を引いて避ける。

このまま回避していくのも手だが、それはユミが狙われるまでの話。
さて、どうしよう。

とりあえず、ユミを逃がそうか？

そう考えた辺りだと思う。

ぱりん、とガラスの割れるような音がした。

そちらに視線が奪われる。

寒気がした。

そして、黒い物体を視覚が捉えた。

観察して、それが空間を割って出てきたことを知覚した。

黒い物体は、表現のし難いシンプルな形で、太い円柱に近い形をしていた。

それが男に襲いかかった。

男の方へ眼を移すと既にそこに男はいなく、黒い物体が俺の想像より速く動いていることがわかった。

そして、黒い物体の先端部分に男の足が見えた。

喰われた、のだろう。

よくわからない。

近寄ってはいけない気がした。
違う。

関わってはいけない。そんな感じがした。

あれが、モンスターか。

俺は逃げようとしたのだけれど。

ユミが余計なものを見つけた。

「あれ、魔女さんですかねー」

割れた空間の中から女性が現れていた。

目が合った。

その視線はこちらをその冷たさで攻撃しているかのように冷え切った目をしていた。

あの黒からよりも逃げたくなる。

だが、数秒してその目から攻撃性のようなものが消えた。
話しかけてくる。

「群れるなんて、珍しい愚弟ね」

のそのそと黒い円柱が穴の中に戻っていく。

さきほどの速度とのギャップは、まるでそれが彼女のペットであるかのような印象を抱かせた。

それはともかくとして。

愚弟とは私の弟という意味なのだけれど。

「俺、一人っ子なんだけど」

「勿論常用の意味だけでなく、文字通り愚かだという皮肉も込めているわ」

「いや、だから俺一人っ子」

人の話を聞く気はあるのだろうか。

「そちらの子の方が変わっているみたいだけれど」

「私ですか？ いやー、それほどでもー」

「あなたはどこまでわかっているのかしら」

女がそう言うなり、ユミの表情が変わった。

シリアス顔である。

つまり、真面目で深刻そうな顔だ。

そのまましばらく無言で考え込んだ。

「……言わんとだめですか」

「ええ」

「恥ずかしながら、魔王を倒さないとだめっばいところまでしか」
「そう」

女がそう言うと、再び黒い物体が出てきた。
今度は球体だった。

それが本を乗せていた。

女が本を受け取ると、黒ボールは戻って行った。

「観察して、これに書き込みなさい」

そう言って本を手渡した。

中身は白紙。

どうやら、ノートのようなものである。

「あの……何を観察すれば」

「この世界のありとあらゆることを。特に人間を観察するといいわ」

「人間……ですか」

「たまに殺したりしてその反応を見たりするとなおわかりやすいわ」

ユミはノートをぱらぱらとめくり無意味に中身を見る。

「ところで、仲間になってはいただけなの？」

そう言って女を見つめた。

女は目をつぶってしばらく固まっていた。

やがて動き出したが、その最初の動きは首を横に振る動作だった。

「なぜですか」

「あなたが自力でこの世界を理解しなければならないの。頭でも体でも」

「じゃあ、その時になったいいんですか」

「そうね。それまでは、あなたがどうしても死にそうな時くらいには手を貸しましょう。それは私にとっても必要だから」

女は割れた空間の中へ入っていく。

その姿が見えなくなると、徐々に割れた部分が塞がった。

「そう言えば、なぜずっと無言でした？」

俺に聞いてきた。

「なんというか、俺をあまり好ましく思っていないみたいだったし」

「そうですか？」

「特に最初の方。拒絶っていうかなんていうか、そんな感じがあった」

「はあ、そうですかー」

ユミはメモをとる。

俺はノートを覗いてみた。

ノートにはこう書かれていた。

とんでもない変態野郎ジカルマ

主にスカートめくりで攻撃してくる。

セクハラの塊。弱点は言わずもがな。

「なんなんだこの俺の評価は！！」

ドタバタ！

「でも的確だと思うのですが」

「そういう問題じゃない！」

ジタバタ！

「制裁！制裁！！」

今はノートとペンで両手が塞がっている！

つまり、反撃を食らう可能性は無い！！

俺はスカートに向けて右手を繰り出し――

めきよっ

金槌ががっ！？

ノートとペンを装備しているはずの両手を見ると、いつの間にか金槌が握られていた。

いつの間にかというか持ち替える時間はなかったはずなのだが。

ノートとペンはどこだ。

探すが見当たらない。

そのまま倒れる。

薄れる意識の中、彼女を再び見る。

ちやっかりノートとペンを持っていた。金槌は見当たらない。

「ありえん……」

俺は倒れた。

第四話：勇者軍団アセトアルデヒド

その後、モンスターにも人にも遭遇しなかった。

そのまま隣の村に着いてしまった。

要するに、モンスターというのは、あの魔女の手下ということになるわけだ。

魔女はこちらの味方になってくれるような態度であつたし、つまりは。

敵不在。魔王のみ。

たまに頭がおかしいやつに襲われるくらいだろうか。

意外にも俺たちは安全なようだ。

……魔女を敵に回したらすぐに死にそうではある。

セクハラはあまりしないでおこう。

セクハラ、といえばユミである。

すなわち、セクハラとユミはニアイコールで結ばれる。

結論、ユミはセクハラに限りなく近いのである。

いや、違つだろ……。

で、そのユミなのだが。

「……」

ずっと考え込んでいる。

よっぽど集中しているらしく、スカートをめくつても反応を示さない。

気付いてはいるはずなので、無視しているということになる。

ところで、ここは村なのである。

さきほど着いたと言つたので、紛うことなき事実である。

さてここに、現在我々は味方を探すべく道端に突っ立っているという状況を追加したらどうなるだろうか？

ここまで言えばわかることだろう。
そんな状況で考え込んでいる彼女はずばるところ変人にしか見えないのである！
というわけで。

「ねーねー、変人。飽きたしお茶しない？」
「ちよつと調べたいことがあるんで一人でしてください」

冷たい。

そこまで素っ気ないとセクハラをしちゃうぞー！
と思ったけれども無視されて空しくなりそうなのでやめておくことにする。

「まあ、うん。わかった」

けっ、覚えてやがれ。次スカートをめくる時が貴様の最期だ。

というわけで。

飲食店に入ろうとした。

その飲食店はメニューが安かったので、この村に来て発見してから目をつけていたのだ。

ここらへんの観察力が勇者にとっては必要なんだよ。

わかるかね、チミ。

そうそこらへんを歩いている勇者っぽい人に話しかけたら害はないのだけれども見た目がなんとなく気に入らない虫を見た時のような顔をされた。

気を取り直して、いざ入らん！

……店が消滅してた。

「あれえ？」

道を間違えたのかな、と思うけれど周辺の建物はさきほど見た時と変わりがない。

店だけ消えている。

逆に言えば、以前の記憶から店を取り除けば全く同じ光景。

おかしいな。

時間によって見えたり見えなかったりする？

「その店は消えたわよ」

魔女の声がした。

いやしかし、魔女とは別れたはずであつて。
でも声のした方向にしっかり魔女はいた。

「小腹が空いたので近くにある場所で済まそうとしたのだけれど」
「別れたのにまたすぐ会うとなんか気まずくないですかね」
「小腹が空いたので近くにある場所で済まそうとしたのだけれど」

また無視か。

あるいは、相手の望む返答をしなくてはならない、か。

「だけれど？」

「お金がなかったの」

「はい？」

「だから店を消滅させたわ」

悪魔だこいつ。

いや、魔女か。

実際そうだからな。

「そうだ。あんたに聞きたいことがある」

「何？」

「噂になっているモンスターっていうのは、あんたが出すやつ以外にいるのか」

「いないわね」

即答。

「ならば、あんたが魔王ということになる」

女が魔王だとは思わなかったが。

そういう先入観はすっぱり斬り落とせるのが俺の魅力である。

そんな素敵人間俺なのでもう少しモテてもいいかなあと思ったりするわけだが。

今はそれどころではない。

「違うわね」

「じゃあ、手下か」

「違うわ」

「それはない」

「魔王はあなたに何らかの攻撃をしかけてきたことがある？」

突然質問で返される。

魔王は攻撃をしてきたか？

答えは……。

「ない。どっかが攻められたって話も聞かない」

「だから、私は魔王と関係はないし、モンスターがいないのよ」

「どういうことだ」

「魔王は攻撃をする気がない、ということよ」

「は？それじゃあ……」

「ただ力を一番持っているから、中心となって世界を安定させているだけよ」

つまり。

魔王はそれほど悪者ではないわけで。

むしろこいつのやっていることの方が悪者っぽいじゃないか。なんだか、馬鹿らしくなってきた。なるほど。

必ずしも魔王が敵であるというわけではないのか。

「わかった。わかったよ」

少し覚悟を決める。

相手は強い。

「あんたを倒せば、世界は平和だ」

「それができたとして、困るのはあなたの連れの子よ」

「……」

新たな疑問が浮上する。

戦う気だったんだけどな。

でも意識は一瞬でそっちに移ってしまう。

戦いはあまり好きではないということもある。

「先ほど言った通り、魔王はこの世界で一番力を持っている存在」

「それは知ってるよ。でも、それほど悪いやつでもないんだろ？」

「そのままでもあなたたちには害がない。ただ、一番力を持っているからこそ私や彼女にとってはどうしても倒さなくてはならないの」
「どうして」

「同時にあなたのような人間も一人は必要なの。答えがどうしても必要になったのなら、大都市に行きなさい。一番の大都市の一番大きな図書館。そこにずっといれば答えは見つかるわ」

「おい、質問に答える」

「私が教えて身につけるべき知識ではないわ。少なくとも、納得がいかないでしょうから」

「どういうことだよ」

「学ぶにはそれに相応しい学び方があるということよ」

わけがわからない。

教えてくれればそれで済む話であるのに。

何を考えている？

俺が知るのを遠回しにして得られるメリットは？

そのメリットを得るのは俺か？それとも彼女か？はたまたユミなのか？

想像もつかない。

とりあえず、やるしかないということか。

「……わかった。そういうことにしておいてやる」

「そう。それではそろそろ帰らせていただくわ」

そそくさと帰ろうとする。

歩き方に少しストレスを感じた。

拒絶されているよなあ。

随分話ができたからマシな方なのだろうけど。

「帰る場所ってどこがあるのか？」

「無理矢理ながらも作ったわ」

たくましいことだ。

さすがにあれだ。

桁はずれな力を持っているとそのくらいできるものなのだろう。
今頃村の一つや二つが彼女の配下になっているに違いない。

……これで彼女が悪なら事情が単純になるのだが。

「あー、そうだ」

と近寄りながら引き留める。

彼女が振り返ったところで俺は腕を伸ばす。
もみつ。

「……っ!？」

「すげえ」

溜め息が出るぜ。

もみもみ。

なんというか、こっす素晴らしい。

もみもみ。

ドゴーン

俺の後方から建物の崩れる音がした。

「……!？」

「手を離しなさい」

「ひいい」

ぎりぎり殺されずに済んだ。

やってみるものだ。

とはいえ、なぜか彼女の殺気だけで押しつぶされそうになる。
比喻や感覚的ではなく、実際に。

殺気がそのまま力となって働いているような。

そんな感じだ。
恐ろしい。

「あー、魔女さんだー」

明るい声。

ユミだ。

「ユミ……助けてくれ……」

「いや、無理っす」

地面と同化しそうだ。

これは、その、金槌より厳しいかもしれない。
いや。

金槌などの追加攻撃の可能性があるということを見るとこちらの方がよっぽど厳しいじゃないか。

「ま、まじへるぶみー」

「こんなこと言ってますけどー」

そうユミが魔女に話しかけると、途端に楽になる。

なるほど、意識がこちらに向かなければそれだけ力も弱まるのか。
俺は解放された。

が、少し埋まってた。
まじかよ。

「それでは私はこれで」

「あー、ちよっと待った」

訝しそうな表情をしている。

しかし、俺が地面に埋まっていることを確認すると、立ち止まった。

「群れて旅をする勇者っていないだろ？で、俺たちは実質三人組なわけよ」

「……なぜ私が数に含まれているの」

「実質三人組なわけよ」

「……」

「だから、団体名というかチーム名というか軍団名というかそういうのがあるとかっこいい気がする」

馬鹿を見る目が二人分。

「で、その名前はどするんです？」

ユミが聞いていくる。

「特に意味がないんだが、なんとなく思いついて、かっこよさげな名前があるんだ」

「無意味なのはいささかあれなんですが……」

「勇者軍団アセトアルデヒドっていうのはどうだろう」

「アセト……アルデヒド……」

俺のネーミングセンスに感動したに違いない。

そう確信していたら、魔女の魔女らしい酷い一言が水を差した。

「アセトアルデヒドは酒に関係する有害物質だった記憶があるわ」

「えええええっ！！」

なんでそんなの思いつくんだよ俺！！
なんでそんなこと言うんだよ魔女！！

「有害物質なのは一人だけなんですが……」

「ええ。間違いなく軍団ではなくあなたの異名がアセトアルデヒド」

そしてネタにされる。

泣きたい。

「うるせえ！何がどうあろうと、今日から俺たちは勇者軍団アセトアルデヒドなんだーっ！！！」

村中に響かせる勢いで、声を張って叫んだ。

他人からそう認識されて、定着すればこっちのモンだ。

こうして俺たちは勇者軍団アセトアルデヒドとなったのだ。

第五話：同一

その後、俺は無事に救出された。

俺の埋まっていたところはしつかりへこんでいて跡になっていた。なんてこったい。

この跡を勇者軍団アセトアルデヒド記念跡としよう。そうしよう。そんでもって日付とか名前とか星マークとかつけるわけだ。ハートマークがあってもいいかもしれない。

……どういう記念跡だ。

「でも、なぜこんなことになったの？」

「いやあ、胸をちよつとこつ、手でぐわしつ、てやったら俺の体がぐわしつ、つて地面にね」

「……」

「いくらなんでも、ここまですることないのにねえ？」

「なくはないかと」

「いいや、ないね。あれは向こうが悪い。罪だ。罪深い女なのだ。ぐへへ」

「よかった……。セクハラされるほどの魅力ない胸で……」

「いや、別に胸ならオールオーケーなんで。非差別主義」

「来るなケダモノオ！！」

ケダモノ扱いーっ！？

「何を言うか！俺は勇者だっ！！」

「有害物質！」

「なぜだ！好き嫌いしないいい子なんだぞ！！」

「無差別セクハラ魔！」

「もしかして俺を褒めているつもりかーっ！！」

「そんなわけないですっ！」

ぎゃーぎゃー。

「バカ死ねクズオタンコナス腐った人間エロモンスターゴミ山海綿
体悪魔犯罪者脳内桃色ペンキ垂れ流し」

「……」

負けました。

「それはそうと、何をしていたの？」

「あー、聞き込み調査というか、まあ、そんなんです」

そう言いながらノートをばらばらとめくる。

なかなか行動力がある。

「そういえば、あの魔女が、どうしても答えが必要なら一番でっかい図書館に行けっさ」

手に入れた情報を教えてやる。

「どうしても、ってことはまだ行く必要がないんですかねー」

「かもしれないなあ」

情報を教えたがらなかったし。
一体どんな情報なのだろうか。

「それで、何かわかったのか？」

「魔王はなぜ魔王になりましたか？」

QアンドQであった。

「サバイバルナイフの値段は？切り傷などに用いられる薬の名前は？今日はいつ？特定の職業の者にしか使用方法を教えられていない魔法の名前を3つ答えなさい。農作業をする時に用いられる物を1つ。秋の魚といえば？」

キューキューシャ
QQ者であった。

とりあえず一つ一つ答えていく。

質問は何十個もあった。

大抵がどうでもいいことというか、常識的なことであった。専門的なことも多少あったし、質問の意味がわからないものもあった。

「それでは最後に。これの使い道は？」

そう言つて金槌を取り出した。
体が一瞬にして強張る。

「ボーイズトレジャーを殴打するため……？」

「ご協力ありがとうございましたー」

メモを終えると、ノートを見返した。

ぱらり、ぱらりと、別のページと見比べながらユミは言つ。

「みんな、同じ答えを返してくるんですよ」

「は？」

「今日はいつか、という質問には誰もわからないと答えましたし、武器や防具などの値段はそんなものに関係なさそうな人、また子供やしばらく外に出ていない人でも知っていました。特定職業に関する

るところに關しても同様です。それと答えるまでにかかる時間も大体同じでしたし、ネコ派しかおらずイヌ派は0%でした」
「ふうん」

それは奇妙なことだ。

答えも同じで答え方も同じというのか。

「ただ……」

「ただ？」

「一人だけ一つの質問に対しては違う回答を返しています」

「なんだそれ」

「金槌を股間を殴るものだと言ったのはあなただけなんですよー」

「がはははは」

「あはははは」

笑える。

それは笑えるぞ。

「要するにあなたは本当にしょうもない人間だということがわかったわけですよー」

「なんつうの？それが個性っていうものなんじゃね？」

「まあ、そういう捉え方もありますが……」

「そうだろうそうだろう」

「でもボーイズトレジャーですよ？個性」

「がふっ」

それはあんまりだ。

もつと素敵個性がいい。

不名誉じゃないか。そんな個性。

「にしても、変だよなー」

「ですよー。まるで、みんな同じ人間であるかのような感じです」

「ああ、それは的確な表現だな」

「なんというか、役目が違うだけ、っていうか。とにかく気持ち悪いです」

「つまりそれは俺は気持ち悪くないってことだなー！」

「いえ、別方向で気持ち悪いです。有害な気持ち悪さを持っています」

「酷いっ！！」

「酷いも何も事実じゃないですか。だって——」

調子に乗ってきたところでスカートをめくってみた。
今日も爽やかなホワイトだね！！

「……」

「ひいっ！？」

何か殺気で圧力かけられてるるる！！

だが……まだ耐えられる！

ていうかどこで覚えたんだそんなもの！

どこの魔女だよお前は！

はっ！？

もしかして魔女と同類の方！？

「ごご、ごめんなさい、だから、金槌だけは……」

「じゃあナイフでいいですかね」

「そっちの方がだめーっ！！」

なんとか金槌で済みました。

ありがとうございます。（倒れながら）

「さて、次はどこに行きますかね」

「一悶着あった後に何事もなかったかのように話を切り換えるのはどうかと思うんだ。僕」

「話が途切れるので切り替えるのには丁度いいじゃないですか」

身が持ちません。

身の一部が、ね。

そろそろ異常が出てくるだろ。本当に。

でも、それでもスカートめくりはやめられない！

「世界の不思議だな」

「はい？」

「いや、なんでもない。次はどこに行こうか」

「そのまま近場の村を目指すのもありだとは思いますが」

「どうせまた同じだろうと？」

「そんな予感が」

「じゃあどうするのさ」

「あえて必要以上に村に寄りつかず、延々と歩くのはどうでしょう」
「うわー」

それは相当きつくはないだろうか。

村でまったりした方がいいって。

人も多いし。

「もしかしたら、変な人に遭遇できるかもしれません」

「槌を玉に使うと答える人が？」

「まあ、そんな人はいないでしょうけれども、そんな感じの人が」
「ふむう」

「魔力の強い人間は変人が多い気がするので」

何気に酷いこと言っているぞこいつ。

天然毒舌家である。

「もし、前みたいに襲われたら？」

「魔女さんが処分してくれます。きっと」

そして他力本願だった。

モンスターがいらないとは言え、危険度で言えば積極的に村に寄った方が低いに決まっている。

だから、自ら危険に飛び込むということなわけで。

なんというか、冒険らしくなったな、と思う。

退屈はしなそうである。

……何か起こればの話だが。

第六話：役不足

しばらく、野外で寝泊まりするようになって、わかったことがある。魔王は最も力のある存在だ。

だから、その力に加担するやつも少くない。

そもそも、悪いやつというわけではないと知っているやつは、積極的に加担する傾向にある。

主にそうだと知っているやつは勇者で、魔王を倒そうとしている俺たちを殺そうとする。

モンスターがいないからと言って、樂觀しすぎていたと思う。

最初に襲われたとき、俺たちは丸腰だった。

金槌は武器として扱うには、いささか頼りないものであった。

次に困ったのが、そいつらを殺さなくてはならないことである。

殺さないで済めばいい、なんて理想はあるのだが。

それをするには骨が折れる。殺してしまった方が楽なのである。

……精神的にはきついんだけど、殺さないで済ますにしてもあまりの大変さにそのうち心が折れるだろう。

「なあ、やっぱり村巡りしながらの方がいいんじゃないか」

時々、そうユミに尋ねる。

人が死んだりするのに敏感で、弱いのはそっちの方なのだ。

戦力にならないということで、実際に殺す所を見ることはない。

とはいえ、殺しているのを知らないわけでもないのだ。

結論。結構精神的にダメージを受けている。

だが、返答は決まってこうだ。

「大丈夫」

大丈夫なわけ、ないだろう。
それでも、この生活は続いた。
まるで、本当に大丈夫であるかのように彼女も俺も平常でいた。

今日はいつ襲われるのだろうか、襲われずに済むだろうか。
などと考えつつ歩く。

昼間襲われることもあれば夜襲われることもある。
夜などに奇襲するのが効果的だ、などとユミが言っていたが、その
ようなケースはほとんどなく、昼間襲われる。
たまに、利口なやつがその奇襲とやらをしてくる。
しかもそういうやつに限って魔法がとても強い。
しかし、そいつらは大抵モンスターにやられる。
ありがとうございます、魔女さん。

「君たちが魔王様を倒そうとしている集団か」

声がした。

真後ろからである。

気配を消して近づかれることにももう慣れていた。
最初は心臓が飛び出るといふ表現を体感したものなのだが。

「あの一、質問があるんですが」

振り返ってユミが言う。

まず、情報収集。

とはいえ、応じてもらえない可能性の方が圧倒的に高い。

「いいけれど」

珍しいな、と思う。

いつも通りユミが質問攻めをする。

質問の内容は繰り返していくうちに少しずつ変わった。必要のないものは削り、優れた質問を思い付けば追加し、順番などについても考えるようになった。

最近では、相手の価値観についても尋ねるようになってきた。

それでも、同じ回答ばかりだと気味悪がる材料にしかないのではあるが。

「ご協力ありがとうございました」

ノートに書き終わると、立ち去ろうとする。

この時、ユミを先に歩かせる。

それも早足で。

「待ちなよ」

どうせこうなる。

俺が振り返ろうとすると何かしらの攻撃。

わかっているので、攻撃を確認した後に予め用意していた動きで回避する。

相手の攻撃もワンパターンであった。

どいつもこいつも同じような攻撃をしてくるものだから、効率の良い回避方法が身に着いてしまった。

だから、やるべきことはどの回避方法で回避する攻撃なのか判断することだけである。

「無駄だ」

反撃はしない。

短剣を握りしめるが、そうしているだけ。
とにかく避ける。

そうやって時間を稼いでいる間に、ユミをなるべく遠くへ逃がす。
残虐なシーンは見せられないからな。

あと、悲鳴を聞くにもなるべく遠くにいた方がいいだろうし。
出させないように努力はするけど。

……。

……………。

残虐行為、おしまい。

「ご褒美にセクハラさせてくれたりとかしないかな」

「いや、無理です」

「ケチー」

お互いの精神のために、しょうもない話題を繰り広げる。

しかし、毎回こんな会話ばっかだと飽きてくる。

飽きてくるのはちょっとまずいかもしれない。

そう、まずいに決まっている。

だから新しい展開が必要なはずである！！

「というわけで強制的にご褒美をいただきますっ！！」

めくりっ。

「みーっ！？」

されるとは思っていなかったのか。
がはは。甘いぞ。

「くうっ……」

金槌を取り出す。

しかし、数多くの戦いを乗り越えた今の俺にその武器では不十分。誤用の方の意味で役不足なのだ！！

ユミはそれをくるっと一回転させる。

すると、なぜか代わりに短剣が握られてた。

そして、俺が腰に身につけているはずの短剣が金槌になっていた。なんなんだこの芸当は。

わざわざ金槌でなくとも、それこそ武器でないものでやったっていいはずだ。

つまり。

「本当の意味で役不足でしたっー！？」

今日は死にかけました。

「死ぬかと……思った」

刃物はだめだって。

シヤレにならない。

数十分における闘争の後、事態はなんとか収まっていた。

「はは……は」

ユミは力なく笑っている。

俺も息が切れていた。

「くそっ……次こそは絶対にパーフェクトセクハラを成功させてや

る……」

「あは……私、もう、だめかです」

彼女の目がこれでもかというくらいわかりやすく死んでいた。

第七話：拒絶

無理矢理ユミを近くの町に連れて行った。
途中で暴れたが、鎮圧した。

強制的に落ち着かせると、転落は早かった。
目に見えてわかる症状として、拒食があった。
食べ物はずぐ吐いた。

そんな自分への嫌悪感もあるのだろう。
坂道を転がるボールのように衰弱していった。
直視できるものではなかったので、医者任せた。

「壊した」

外に出ると、魔女がいた。
腕を組んで建物によりかかっている。

「彼女を、壊した」

「……いつかはこうなつたと思う」

引き金を引いたのは自分であるが。

「もつと早く答えに気付ければ、大丈夫だったわ」

「答えってなんだよ」

「人を殺したときの精神的な負担が軽くなる。そんな魔法のような真相よ」

「そんなもの見つからないに決まってるだろ」

そもそも、そんなものがあるとは思えない。
人を殺しても大丈夫でいられる？

そんな真相はどう考えたって存在するはずがないじゃないか。
人殺しは人殺しだ。

「みんな同じなんだぞ」

「どいつもこいつも同じようなことしか言わないんだぞ！」

「一人の人間に同じことを聞いてるみたいじゃないか！そんなんで何がわかるんだよ！」

言葉が次々に出てきた。

不満や不満や不満や不満だ。

ストレスの塊を魔女は無言で受け止めた。

「本当にどいつにもこいつにも話をしたの？」

「少なくとも、あいつは」

俺はノートを突き出した。

弱っているので、代わりに俺が書くことにした。

いや、弱っているのをいいことに、そう押し切った。

「村や町の人間全員、それと道中で出会った人間全員。返答がないやつを除けば、それら全ての人間について書いてある」

「同じ質問をしているのね」

「みんな同じようなことしか言わない、ってあいつが気付いたんだ」
「そう」

後半の方は結構省略されている。

特別に何か書くことがない限りは一行程度に済むほどだ。

「……俺たちはどうすればいいんだ」

「自分たちが必要だと思うことをやりなさい」

「俺はあんたの協力が必要だと思っている。戦力的にも、知識的にも」

「それは無理な相談ね」

「それなら、力づくでせめて知識だけでもいただく」

俺は短剣を抜く。

命と引き換えに情報を聞き出せれば。

この手詰まりな状況から脱出できるはずだ。

襲いかかろうとした瞬間、強い力が俺にかかる。

寒気もしてきた。なぜだ。

「あなた、せめて私が相手のときくらいは魔法で攻撃したらどうなの」

「魔法で……？」

「魔法はあなたの意志よ。あなたが魔法で攻撃しないのも、あなたが魔法で攻撃をくらったことがないのも、攻撃する意思がないからよ」

唐突に何を言い出すか。

「一度だけあるぞ。ユミから食らった。威力は低かったけれど」

「威力が低いのは彼女だからよ」

圧力のせいで身動きがとれない。

押しつぶされないようにするので精いっぱいだ。

そのうちに、モンスターが出てきた。

球体のその黒い物体がゆっくり俺に近づいてくる。

寒気で非常にまぶくなる。

眩暈がした。

近づくほどにそれが酷くなる。

嫌な汗が出ているのを、なんとなく感じた。

「なあ」

声を絞り出す。

「どうして、そんなに俺を拒絶してるんだ？」

なんでそんなことを言っているのか自分でもよくわからなかった。その瞬間、圧力とモンスターが消えた。楽になる。

直感的な感覚がそのまま声になっていた。たぶん、そんな感じだ。

「最初にあんたに会ったときから感じてた。あんたは、俺を、いや、全員を拒絶してる。あれ、ユミは違うかな。まあいいや。魔法が意思によるものだっていうなら、あんたの強さはその拒絶の強さにあるんだ」

「……」

「だから、強く俺たちを拒絶しているあんたはその分強いんだ。なんであんたはそこまで拒絶してる？」

「なかなか、わかるようになってきたじゃない。私の弟」

今度は、愚かだという意思がなくなったようだ。とはいえ、弟ではないのだが。

「あなたの素敵な成長の見返りとして、ヒントをあげましょう」

「ヒント？」

「アセトアルデヒドという言葉はどこの本を探しても無かったわ」

「は？」

「それじゃ、また今度」

「おい、ちょっと待て——」

そのまま、去っていつてしまふ。

追いかけることはできない。

彼女は自分の魔法で移動しているからだ。

有害物質って言ったのはあんたじゃないか——

「飯は？」

首を振る。

食えないようだ。

困った。

あれから、一つの考えが浮かんだのだが。

しかし、それを実行するには移動することが必要で。

でもユミがこのような状態だと移動なんてできないわけで。

「……どうしよう」

あらかじめ、目的地までの距離を調べていた。

地図を見ながら計算してわかったのは、今まで通りのペースで移動したとして、数日かかる、という都合の悪い状況だった。

治るのを待つ、にしても精神的なものじゃあいつ治るのかわからない。

俺一人で行くにしても、こっちを一人にするわけにもいくまい。

……魔女がいればな。

改めて、仲間にできなかったことを惜しく思う。

次に会うと言ったって、この村にいたら会いそうもないわけだし。詰まった、か。

打開策はないのか。

例えば、奇襲。

奇襲されれば、彼女は来てくれる。

けれど、村を襲うなんて偶然は期待できないし、村を離れて奇襲を待つのも先ほどの理由があるから却下とする。

じゃあ、どうすればいいのか。
考える。

ひたすら考える。

それしかすることはない。すべきことも他にない。
そして、思いついた。

気の進まない方法だけでも。

そこまでして急ぐ意味があるのか、なんて聞かれたら元も子もない話だけでも。

良い案だ、と自分の中で評価し、実行することにした。

第八話：奇襲

夜。

外にいる。

外にいるから、月が見える。

満月でも新月でもない。

だが、それでも月はわざわざ上を向いて見る価値があると思わせるくらいに綺麗に光っている。

今日は明るい夜だ。

月の下では、建物が燃えている。

最初に燃えたのは、俺の泊まっている宿屋だった。

奇襲である。

奇襲。

奇襲なのだ。

そこから、次々に火がつけられる。

用意は完璧だったようだ。

全ての家に細工があらかじめしてあり、そこに魔法で火をつけた。

魔法自体の威力は低かった。

だが、細工のおかげで家を燃やすには低い威力でも十分なのであった。

逃げる人々に関しては、邪魔にならない者ならば燃やされずに済んだ。

要するに、彼らは標的ではないのだ。

では、なぜ無差別に放火されたのか？

その答えはそのうち明らかになることだろう。

俺はやるべきことをやらなければ。

死なないように、細心の注意を払う。

彼女はそろそろ来るだろうか。

自分の感覚をフル稼働させて、彼女の魔力を感じようとするが、で

きない。

まだ来ていないのだろう。

「さて、と」

俺は炎を眺めるのをやめて、ユミがいる病院へと歩く。

そちらの方向はまだ燃やされていない。

行く途中で多くの家がまた燃えた。

人はあまり燃えなかった。

みんな逃げるので、燃やす必要がないのだ。

結構時間がかかったものの、病院に着いた。

病院周辺は無事である。

途中で、火を鎮圧させようとした集団がいたが、みんな死んでしまった。

斬殺である。

それなりに豊富な戦闘経験により、楽勝と歌いながら殺せるほどであった。

俺は無事であった。

数人がかりであっても負けなかったことは自分のことながら評価できと思う。

「狂ってやがる」

呟く。

わざわざこんなわけのわからないことをする必要もなかりつに。

狂っているからこそ、そういうことができるのか。

よくわからない。

町はよく燃えている。

辺り一面炎である。

「お」

恐ろしい気配をまとった人影を発見。

魔女である。

手を大きく振る。

すると、こちらへ走ってきた。

「敵は？」

「いない」

「こちらにも敵には誰一人として遭遇しなかったのだけれど」

「まあ、とりあえずここが無事でなにより、か。きっとここも細工されてる」

「そうね。ここで待ち伏せするのも手かもしれないわ」

辺りを見回すが、誰も来る気配がない。

「それにしても、ここまで魔法でできてしまうとは」

「攻撃の意思が強ければ、町一つ燃やせてしまうわ。けれど……」

「けれど？」

「細工がしてあったとはいえ、相当な魔力が必要よ」

「さいですか」

きよろきよろ敵を探しながら話す。

炎と星と月が綺麗である。

しかし、少し暑い。

炎のせいだな、と思う。

「ところで、頼みたいことがあるんだが」

「こんなときに、何？」

「あんた、魔法で移動できるだろ。なんていうか、ワープ、みたいな」

「ええ、できるわ」

「あれって、誰か連れてできるのか？」

「一応、できることにはできるわ。けれど、あなたの場合は命の保証ができないわね」

魔法の源が俺への拒絶だからか。

「じゃあ、ユミなら大丈夫か」

「ええ。大丈夫よ」

よかった。

ここで駄目だったら非常に困るところであつた。
駄目でも続きの内容が変わるだけで、頼みたいことがあるのには変わりないのだけれど。

「図書館、あるだろ。前にあんたが言った、一番大きい図書館つてやつ」

「ええ、あるわね」

「あそこまでユミを連れて行ってほしい」

「……何を言いたいのかわからないわね」

「あそこまでユミをワープさせてほしいんだ」

「なぜ？」

「たぶん、必要なことだから。それに、あの状態で普通に移動するわけにはいかないだろ」

そう言つて、魔女の方を見る。

どういう返答をしてくるだろうか。

町がこの有様ならばオーケーを出すか？

それとも、そんなことは関係ないか？

そうならばそれで別にいい。

俺にとっても、町の被害なんて関係ないからな。

「訂正する」

向こうの返事を待たずに言う。

いや、返事をされる前に、言う。

「本当のところ、頼みでもお願いでもない。脅迫だ。ユミをそこま
で連れて行け」

俺は病院の方へ手を向ける。

魔力を炎へと変える。

これで、いつでも病院を燃やすことができる。

「連れて行かないと、ユミを殺す」

「あなた……」

驚いた目で俺の见ている。

ここまで彼女の目を見開かせたやつはそうそういないだろう、と確
信を持てるくらいだ。

「あなたが、犯人だったのね」

「ああ」

「こうするためだけに？」

「ああ」

理解が早くて助かる。

相手の解釈とのずれを埋めるために、ネタばらしをする。

「さっきも言ったように、ユミが移動するにはあんたにワープさせてもらうのが一番いい。でも、あんたはなかなか出てこないし、前に会った以上、ここにいる限り会う可能性はゼロに近い。けれど、一つだけ、あんたがほぼ確実に来てくれるミラクルなイベントがあるんだ」

「……奇襲で、あなたたちの命が危ないとき」

「そう。奇襲。けれど、そんなのが起きてくれることを祈っても仕方がない。だから、自分で奇襲をしたんだ。あんたが絶対に来るよ、うな、そんな派手なやつを」

念入りに準備をした。

魔法の威力をなるべく高くするために、自分の意志のコントロールに力を入れた。

そして、それらが実を結んで計画は見事に成功した。

「あんたの言う通り、真相を知れば負担が和らぐのであるなら、ユミに必要なのはそれが見つけ出せる環境だ。そして、その図書館がその環境なんだろう？」

「……」

魔女は黙っていた。

しばらくして、ふう、と溜め息をついた。

「わかったわ」

俺は安心した。

脅迫したとはいえ、彼女に被害があるわけではない。だから、断られる可能性があったのだ。

「でも、あなたはとうするの？」

「そのうち合流するよ」

「そう」

魔女は簡単な返事をするなり病院の中へ入るべく歩き出した。
そして、ドアの手前で立ち止まり、こちらを振り返る。

「次会うときも、面白く成長していることを期待しているわ」
「次会うときは、落ち着いてセクハラできることを期待する」

それに対する返事はなかった。

さて、一人旅。

がんばるか。

第九話：X

久々に一人だ。

外は広い。

人は多い。

けれども、俺は一人なのだ。

ふとした瞬間に話す相手がなくて、少し困る。

「んー……」

あの日そうしたように、見知らぬ人にセクハラをしていいものなのだろうか。

それでも少し悩む。

悩んで、実行してみた。

反撃がないのがやけに新鮮だった。

スリルに欠けるのが難点か。

スリルを出すにはどうすればいいか。

「そうか、もっと過激なことをすればいいのか」

女性を発見。

素早く背後に回り込み――

……

……

……

「あれ？」

いつの間にか女性もいなくなっている。
場所もなんか通行人のいない裏路地に移動している。
なんというか、確信はないのだけれど。

時間が飛んだ？

体内時計と認識のずれがそんな感覚を訴えている。

「うつむ」

おかしいな。

もう一度やってみるか。

きよろきよろ。

女性発見。

後ろに回り込む。

今度こそ。

俺は――

.....

.....

.....

「あれれー？」

まただ。

くそっ、もう一度だ。

今度はもつとゆっくりと行動して、しっかりと成功させてやる。
きよろきよろ。

辺りを見渡す。

女性発見。

見た目、とてもよし。

ターゲットに認定する。

ちよつと背後を尾行した後、魔法を自分にかける。

自己強化を徹底して、気配を消したまま高速で真後ろに立つ。

腕を動かす。

狙いは――

……

……

……

「なんでだよっ!!」

何が起こつていやがる。

しょうがない。

やろうと思ったことをノートに書いておいて、不可解な現象として報告しておこう。

えーと、なんて書こう。

とりあえず、時間が飛ぶ瞬間にやろうとしたことを書くべきだな。

まず、俺が――

……

……

……

「……」

もう流石に慣れてきたぞ。

ノートにはしっかりと文字が書かれていた。

「そうだな、よんでみるといいかもしれないな（棒読み）」

ノートを両手で持つ。

「女性に向かって——」

……

……

……

なんだか楽しいがわけがわからない。

「ん？」

ノートに追加されている文字列を発見する。

なんだこれ？

書いた記憶もないし、書こうとしてもいないぞ。

ノートにはこう書かれていた。

『「通常」で投稿されると規定違反となり、場合によっては作者IDが無効となります。』

わけがわからない。

通常？通常じゃないってどんなのだ？

ID？なんだそれは？

誰が書いたんだこんなの？

謎は深まるばかりだった。

そんなことばかりしていたら、いつの間にかお昼時になっていた。
しまった、一日を無駄に過ごしてしまった。

そそくさと物資を購入して、再び旅を再開する。

早くユミと合流できるといいのだが。

歩いていては時間がかかる。

あとどのくらいで着くんだっけ？

道のりでは大体残り半分くらいなんだが。

ここは馬車などの移動手段を使うべきなのだろう。
なるべく速い移動をする。

そうすれば早く目的地に着ける。

まあ、常識的なことなのだが。

しかし、困ったな。

お金がないのである。

だからって、わざわざ町とかで仕事をするのも気が乗らない。
下手したら、逆効果になってしまう可能性もあるからな。
どうにかして、楽に金を稼げないものか。

「うーん」

そんなことを考えていると、後ろから何かが来た。

「やべっ」

素早く回避する。

短剣を抜いて、戦闘態勢に。

「魔王に逆らうお前を排除する」

流石に慣れたぞこの展開。

というか。

そんな感じのセリフは前にも聞いたことがあります。

というわけで、戦闘開始。

俺の勝つ可能性…… ほぼ100%

だって、相手の動きは大体読めているし。

…… 戦闘終了。

「わーい」

馬車に乗って移動する。

お金があるって、いいなあ。

夜までスムーズに移動した。

今夜は野宿だ。

お金の節約は大切なのである。

ただ、野宿だと、例の奇襲に気をつけないといけない。

魔女がいるから大丈夫なのだけれど、

あんなことをした以上、一番大きい図書館のある街までは会う気になれない。

なので、徹夜である。

ちよつと眠っても、深い睡眠にならないように、体勢に気をつける。

特に、寝転がらないように。

感覚を敏感に働かせ、相手を捉える。

飲み物を飲んだりする際も、決して気を抜かないようにする。

「……！」

捉えた。

相手の攻撃を待つ。

少しの殺気を感じて、それに反応して体を動かす。
攻撃を回避するのに成功。

そのまま、処理する。

「ずーずーずー」

今日も快適馬車移動。

馬車で寝る。

昼夜逆転生活だ。

実のところ、あんな感じのことが一晩で五回繰り返された。
最近、多いのである。

知名度が上がってきたのだろうか。

目をつけられている……のは間違いないだろう。
街中でも気をつけないとな。

そこらへんのメモをノートにしておいた。

安定した収入源。

そういうこともきちんと書いておいた。

そして、たどり着いた。

目的地に。

第十話：影響

ついに着いたのだ。

思ったよりも短かった。

敵を殺せば、そいつの金が奪える。

その金で移動することができる。

我ながら、スムーズな行動だった。

まるで、想像していたよりもはるかに道のりが短かったような。

そんな感じた。

それにしても、これまた想像以上に人を殺した気がする。

どうしても返り血がかかってしまうのが問題だ。

不衛生。

あ、そうだ。短剣を買い替えることにしよう。

さすがに、新品でないと不安が残る。

いつでも殺せる準備は必要だ。

例えば、今日に入った勇者っぽいやつが、俺の命を狙っていたとし

たら？

攻撃してくるまで待つよりも、先に殺してしまった方がよいだろう。

……。

短剣二本分の金を手に入れた。

少し騒がしいな、と思うと、俺と目があった人間がどんどん逃げ出

す。

なんだなんだ？

何が起きている？

そう戸惑っていると、誰か来た。

本当になんなんだ？

誰か説明してくれ。

……とりあえず、追加で大量のお金を手に入れた。

図書館の前に、魔女がいた。

「おひさし」

「……久しぶりね」

ザ・セクハラタイムツ

と飛び込もうとしたら、吹っ飛ばされた。

魔法の威力は今日も絶好調なようだ。

「あなた、やけに赤いんだけど」

「赤？ああ、返り血？」

「やけにそれっぽい色をしていると思ったら、まさにそれだったのね」

「そりゃ、人殺せばつくよ」

そこに、また武装した集団がやってくる。

しつこいなあ。

殺す。

「なんか、この街に来てから俺、追われてるんだよね」

死体の持ち物を探る。

ぴくり、と体が動く。

あれ？

まだ生きていたのか？

ぐちより。

念のため、もう一回刺しておく。

ぐちよ、ぐちよ、ぐちよ。

動かなくなっただのを確認。

再び持ち物を探る。

「武装しててさ、服装が同じだから同一集団だとは思っただけど」

「その人たちは治安を守る人たちよ」

「治安を？」

ぐちよぐちよ。

財布発見。

中身を見る。

よかった、赤くなつてない。

二人目の持ち物を探る。

一人目みたくまだ息があったりするかな？

とりあえず、確実に生きていない状態にする。

「で、治安を守る人がなんで俺を襲ってくるわけ？」

「……」

反応がない。

俺は黙々と作業をしながら返答を待つ。

持ち物を探り終わったやつはわかりやすいように背中を傷だらけにしておく。

四人目の持ち物の搜索を始めたところで、返事がきた。

「あなたがちよつと見ないうちにそこまで狂っているからよ」

「狂う？」

「まだユミのようになった方がましだったわね。答えはまだ見つかってないのでしょうか？」

「答え？ああ、そういえばそれを探しにここに来たんだっけ。ところでユミは相変わらずなの？」

「ええ。変わったのは図書館に足を運ぶようになったってことから

いね」

それは困った。

どうにかして元気を出させないと。

俺との再開で元気になったりしないか？

無理か。それは。

とりあえず、手に入った金で豪華なご飯でもどうだろう。

豪華なものなら食えるのではなからうか。

そうと決まればがんばらなくっちゃな。

ぐちよぐちよぐちよ。

搜索の効率を上げる。

お金は結構手に入った。

豪華なご飯どころの騒ぎじゃないぞ、これは。

そういうわけで、図書館に入ろうとすると、吹っ飛ばされた。

魔法？

魔女のか。

「何すんだよ」

「何をするつもり？」

「ユミに会って、景気づけにご飯でも、と」

「あなた、その状態で？」

「その状態って何のことだ？」

わからない。

「血まみれの明らかに人を殺してきましたっていう格好で会う気なの？」

「あー」

そっか。

人殺すの、苦手だもんな。

それが原因でこうなっちゃったんだもんな。

「それ以前に、今のあなたのような危険な存在を彼女に近づけるわけにはいかないわ」

「危険？なんで？俺、ユミに攻撃なんてしないじゃん」

「たった今大量虐殺をした人間がそれを言ったところで、説得力はないわ」

魔法の圧力にかまわず、前に進む。

前に進めるとわかった瞬間、魔女は俺が何を言っても反応しなかった。

その代わり、魔法の力が一気に強くなって、俺は吹っ飛んだ。

「いてー」

「弱いというのは、困りものね」

「何が」

「弱いと、それだけ変化しやすい。中途半端に弱いあなたには、殺人の影響は大きすぎたのよ」

わけがわからない。

と、そこに図書館からユミが出てきた。

「あ、ユミ、おひさー」

手を振ると、ユミは固まった。

「どうにかやっていける？」

「その、どうしたんです？」

「どうしたって、何が？」

「その……血……」

「ああ、返り血だよ」

人を殺して、持ち物をあさるんだ。

そうするときは、財布を大抵持っているんだ。

それで資金を入手してさ、馬車とかで移動するんだ。

これが結構便利でさ――

そう話していると、ユミがこちらへ歩み寄ってきた。

「ばか」

そう呟いて。

意識が一瞬飛ぶ。

何が起こったのか、理解できなかった。

顔が痛い。

そして、意識の飛ぶ少し前に捉えたユミの足から、俺が蹴られたことを認識した。

「な、なにを」

するんだ。

そう口から出る前に、ユミはどっかに行ってしまった。

なぜ俺は蹴られたんだ？

思考する。熟考する。長考する。

なぜ？

なぜ？

なぜ？

……ああ。

そうか。

人殺してよくないことなんだな。

まだ魔女が傍にいた。
魔女に話しかける。

「俺、悪いことをしてたみたいだ。それも、随分と過激なの」
「ようやく、気付いたのね」
「変化しやすいって、このことか」

思えば、いつの間にか殺人が平気になっていた。
生活の一部になっていて、
そして、普通の行動となっていた。
で、今蹴られて。

身近な人からばかただけ言われて、蹴られて、それだけで。
それらに気付いてしまった。
殺人が平気でない人間にまた変化した。

「なんで、弱いと変化しやすいんだ？」
「それがこの世界の常識だからよ」

魔女は平然と言った。

「それに、意思が弱ければ影響の強いものに飲み込まれてしまうから」
「」

「……へえ」

しばらく、ぼおつと考える。
……あれ。

「もしかして、ユミに影響されてる？俺」
「ええ」

「……俺ってユミより弱いのか」

不安。

「そうじゃないわ」

魔女はユミが去って行った方向を見た。
俺もそれにつられてそっちの方を見る。
ユミの姿はまだ見える。

「あれが彼女の力だからよ」

明確にわかる答えは、俺には与えられなかった。
とりあえず、彼女に感謝をしなくては。
そして、彼女を元気にしないと。

第十一話：「日記」

今日はいつだろうか。

すっかり記憶していないと、わからなくなってしまう。

今記憶している日付は正確なものかわからない。

そもそも、ここで日付というものは意味を成さないようで、自分がいかにそれに縛られていたかを実感している。

……こういうことを考えているときは平気なんだけどな。

あ、しまった。

そんなことを考えたばかりに。

脳裏に浮かんでくる。

赤。

血。

殺人。

あああ。

まずい。

ゲロリンが来てしまう。

最近、頻繁に吐くようになってから愛着のある名前を付けたが、苦痛は全く緩和されない。

走る。

トイレで、ゲロリンを排出する。

ううう。

一日三回くらいはこんなことをする。

ゲロリン。ピクである。

……神聖な大会が一気に汚物だ。

しかし困った。

まさかジカルマさんが殺人鬼になるとは思っていなかったから。

まだセクハラ魔の方が精神的にマシだったなあ。

それはともかく。

……というふうに変換させないとまたゲロリンが来るのである。
（自虐ネタ）

っと、それはともかく。

今日も手掛かり探しを頑張ろう、おー。

「うげ」

図書館に入るなりすぐさま殺人鬼を発見した。

今日は赤くないのでまだ直視できるものの。

襲われたらどうしよう。

昨日の様子だと、こっちに危害を加える気はなさそうだったけど。

おろおろ。

あ、目が合った。

まず。

そう思った瞬間、物凄いスピードで接近してきて。

ああ、終わった――

人生を諦めた。

走馬灯って、即死でも見させてもらえるのかな。

見れないなら困るけど、でも痛いのもなあ。

ふわさあつ。

……？

「今日も綺麗な白だね」

ずばきやああああああっつつつつ！！！！

「ぐぐええええっ！！」

スカートをめくるセクハラ魔の退治に成功した。

ユミはセクハラ魔に鉄槌を与えるために金槌の常備をみなさまに推奨します。

股間を押さえて苦しんでいる。
ざまーみろー。

「ひ、ひどい」

「殺人鬼が寄ってきたら誰でも殺されると思います。心臓止まります」

「だ、だからそのことを謝ろうと……」

倒れながらじたばたするそれが情けない声をあげる。

「あなたの蹴りがうまいこと効いて、殺人衝動が消えたみたいよ。彼」

「あ、サキさん」

魔女ことサキさんがいた。

「へえ、サキさんと言っんですか。良い名前ですね、どうです、僕とお茶でも——」

「黙れ」

なぜか復帰して立ち上がったジカルマさんを、サキさんは。
蹴りあげた。

セクハラ魔は崩れ落ちた。

「あれ、魔法じゃないんですね」

「こちらの方が効く気がして」

「確かにそうかもですねー」

「まあ、とにかく、彼は一応大丈夫だから。それでもまずそうにな

つたときはまた蹴るなりしてあげなさい」
「うーっす」

サキさんは図書館から出て行った。
あの人の行動はよくわからない。
まあ、いいか。

「ところで、大丈夫です？」
「気遣うくらいなら最初から攻撃しないでください」

それは無理な話だ、と思った。

「何か良い情報はあったのか？」
「えー、まー、一応」

そう言つて、慣れた動きで本を探す。
題名のない本というものは、こういうとき大抵重要なアイテムだったりする。
意味深なものも含めて、タイトルでピックアップして探した結果、
見事に一つ大当たりがあつた。

「これです」
「なんだこれ」

ジカルマさんはそれを流し読みする。
その中身は日記だ。

日記の中には、こう書いてあつた。

7月20日

誰もいない。

俺だけの空間。

平和だ。

誰も俺を傷つけることはできないのである。

7月21日

しばらく不登校をすると、慣れるものだ。

最初は罪悪感があったものの、今ではそのような感覚はない。
これが、正しいのだ。

自分の身を守ることは最善の行為だ。

7月22日

部屋を自分のために改造する。

敵が侵入できないように強化した。

これで、安心できる。

「なんだこれ？」

読んでから、ジカルマさんが再び聞いた。

「日記っす」

「日記………ね」

ぱらりぱらり。

戻ったり進んだり。

ページを変えながらちらちら読む。

「なんというか、よくわからん」

ジカルマさんは変な物体を見るような顔で日記を読む。

「不登校？」

そして首をかしげて、次々とわからない単語を挙げていく。

私にはこの日記が重要アイテムであることがわかる。

けれども、この日記がここにある意味がわからない。

そして、この日記がここにあることでわかることも検討がつかない。
一体、この日記は何なのだろう？

「あー、ところでさ」

「うい？」

「そのー、なんだ。食欲とか、大丈夫なのか？」

言いにくそうだった。

そりゃそうか。

「あー、それはですね」

実のところあまり大丈夫ではない。

けれど、それなりには大丈夫だ。

そう返答しようとしたのだが。

赤。

血。

殺人。

また脳裏に浮かぶ。

ああ。

なんでこんなときに。

「すみません、ちょっと、ゲロリン」

駆け出す。

ゲロリンを排出する。

本日二度目だ。

口を拭く。

溜め息。

で、戻る。

「大丈夫か？」

とっても心配されていた。

「この通り、あまり大丈夫ではないのですが、随分ましになりました」

「そうなのか？」

「まあ、本とかに没頭している間は大丈夫なのです。あと、今は吐いた直後なので平気でして」

ただ、何かあって血とかを思い出すとまずいだけけれど。とりあえず、ゲロリン直後の今が一番安定している。だから。

今まで溜まっていたものを吐き出すには丁度よかった。

「なんで、人を殺さないといけないんでしょう？」

ジカルマさんは、固まった。

「相手が襲ってこなければ、こっちだって何もしなくて済むのに」

「向こうからすれば、拠り所である魔王を倒そうとする俺たちは早めに処分したいと思ってても、おかしくはないと思う」

「それでも、だからって襲ってきた相手をこっちが殺すのもおかしいじゃないですか。効率がいいからって、それが一番良いってわけじゃないじゃないですか」

ジカルマさんは黙る。

それが、私の言うことを聞こうとしているのだとわかると、口から言葉が自然と出てきた。

「私には、戦う意味がよくわかりません」

それっきり。

それっきり、沈黙が場を占めた。

沈黙を破ったのは爆音だった。

本棚が爆破されたのだ。

それは、敵の攻撃であり、その敵というのは、私たちを狙っている。つまり、戦いが始まる。

それを理解するのに、そう時間はかからなかった。

第十二話：「勇者軍団アセトアルデヒド」

爆発。

一体誰が？

辺りを見回してもわからない。

ジカルマさんが探している途中で、はっとして私の腕を掴んだ。

「逃げるぞ」

「え、あ、はい」

走り出す。

爆発は私たちを狙っているというより、私たちを威嚇しているようで、大きな音と派手な騒動を巻き起こすように次々と物を破壊していく。

本棚から本が散り散りになり、柱が崩れる。

しかし、それらの破片すら私たちに当たる気配がない。

それでも、とりあえず逃げた。

私たちが図書館から抜け出すまでに、内部は混乱と崩壊で埋め尽くされていた。

その混乱は、外にも広まっているようで、逃げる人々が確認できた。

「誰がこんなことを……」

と、立ち止まって呟くのも一瞬。

すぐにジカルマさんは再び走り、私はそれに引つ張られる。

「どこまで行くんですー？」

「わからんっ！」

とりあえず走る。

周囲の建物が爆破される。

耳が痛くなる。

どんどん殺風景になっていく。

まるで汚い部屋を掃除していくかのように、物がなくなっていく。

何の演出だ、これ。

そんな突っ込みを入れようとした瞬間。

四方八方、全てが爆発で包まれた。

「やばばっ」

「くそっ……」

煙幕がなくなるのを待つ。

それで人がいなければ再び逃げるのだが。

当然、こんだけのことをしたのだからさういうわけにもならず。

私たちは囲まれていた。

「どれがリーダーだと思う？」

「さ、さあ……」

どれも同じような服を着ている。

違う服を着ているのなんて、初めから私だけだ。

まあ、他の人が高校生の制服なんて着てるわけではないか。

そのうち一人が飛びかかってきた。

速い。

ジカルマさんより動きが速いのが、見ただけでわかる。

それくらい、速さに差がある。

ジカルマさんが短剣を抜いて、対応する。

普段なら数秒後には決着が着くのだが。

相手も短剣で、何度か攻撃する。

ジカルマさん押され気味。
まずい。

そう思っていると、突然敵は襲いかかってきた時よりも格段に速いスピードで身を引いて、飛び退く。

元いた場所を黒い物体が横から通り過ぎた。

黒い物体は進行方向を変え、休むことなく襲いかかるが、敵にはかすりもしない。

「無理ね」

私の傍で、空間に黒い切れ目が入る。

そこから、サキさんが現れる。

「倒せないとは珍しいな」

「何もかもあなたのせいよ」

ジカルマさんを睨みつける。

「あなたに被害が及ぶから、思う存分できないのよ」

心底迷惑そうだ。

そういえば、ジカルマさんがいないときに聞いたのだが。

この世界で魔法というのは意思が関係するらしい。

サキさんの場合、相手を拒絶する思いがあのか力になっているそうだ。拒絶の対象にはジカルマさんも含まれていて、そのせいで今、力を使えないのだろう。

「どうにかならんのか……」

圧倒的に不利だった。

こちらが被害を受けないようにするので精一杯。
反撃もままならないまま時間は過ぎる。

「魔法がそのうち来るわよ」

「魔法？」

「ええ。襲いかかってくるのは一部のみに。それ以外、特にさっきまで爆発を起こしていたやつは確実に魔力を溜めているはず。だから、そういうタイプの強い魔法が来るわ」

「それが来た場合はどうすれば？」

「そのときに判断しなさい」

無理です。

そう心の中で抗議した。

「魔法を使っているやつを倒すことはできないのか？」

「そうね、やってみるわ」

黒い物体を、全く動かない敵へ向けて動かす。

大抵が、他と同じように避けた。

しかし、一固まりの集団だけは違った。

魔法でバリアを張って防いだのだ。

「あそこっすね」

「間違いなく」

集団を睨む。

その瞬間、笑い声が響いた。

「なかなかやるではないか！噂の集団！君たちが察したであろう通り、私がリーダーでありこの世界の柱の一人だ！！」

集団の中心にいる男がそう言った。
ジカルマさんが動こうとしたその瞬間。
その男は冷たく告げた。

「もう遅い」

ジカルマさんが動く前だった。

突然、私の体の受けていた重力が無くなる。

地面が消えていた。

足元には、暗闇。

真っ暗だ。

私は、そこに落ちた。

私は悲鳴をあげることしかできず、

みんなもそんな私の悲鳴を聞くことしかできなかった。

そして、視界が黒で染まった。

疑問その1。

ここはどこか。

暗闇でも、かすかに声が聞こえる。

いや。

頭の中に伝わってくる。

音声と映像が。

さきほどの男が、短剣で襲いかかるジカルマさんに説明する。

私は、世界に取り込まれたのだと。

世界に吸収される魔法なのだ、と。

つまり、私は世界の一部にされてしまったのだ。

なるほど。

だから私はこうして、このような光景を知覚できるのか。

納得。

疑問その2。

この世界とは何であるのか。

世界の一部になるといったって、この世界ってのがわからない。
なぜ同じような人間ばかり？

なぜ魔法が使える？

一体――

その瞬間、何かが見える。

暗闇。

違う。

わざと暗くした空間。

狭い空間。

部屋？

モニターの光だけが照明として機能している。

学生。

不登校。

ひきこもり。

単語が脳裏に浮かぶ。

それが私。

違う。そうじゃない。

それが、世界。

世界がひきこもり？

世界が不登校？

日記。

あの日記。

それが頭の中で存在を強める。

なぜここでそれを思い出す？

世界はひきこもりで不登校で、日記で、みんな同じ。
結びつける。

「あ——」

理解。

理解が頭の中で満ちる。

世界は。

この世界は。

最初っから一人だったんだ。

この世界は、一人。

この世界の人間は、一人なんだ。

世界は、あの人間だ。

あの日記を書いた、ひきこもりで不登校である、その人が。

私はそこに入れられてしまった、他人。

おそらく、サキさんも。

だからあの人は拒絶をしているのだ。

この世界は自分に被害を与えた人間だから。

私が、世界という他人にすることはなんだろう。

問いかけの答えは、体から溢れる魔力として、現れた。

光。

光が暗闇を退ける。

外が見える。

ああ。

戻ってこれた。

「ユミ……」

ジカルマが、敵が、大きく目を見開いて、私を見ている。
私は空中で、自分の魔法で浮遊しながら帰還した。

今、私が中心となった。
世界に。

この世界を作った人間に。
影響を与える中心に。

「この世界の全てがわかりました。世界は一人の人間でした。私と違う、一人の人間。その人は、私を取り組もうとしました。私をこの世界に迷い込ませ、そして、今回、私を自分の一部にしようと思いました。でも、私はその人とは他人なのです。違う存在なのです」
息を吸う。

「だから、私は、私自身を貫きます！この世界が私を選んだ以上、私が世界に影響を与えます！」

大量の魔法が飛んでくる。

魔法は意思。

世界の主の意思。
だけど。

「そんなもの、私の心を傷つけられない！！」

叫ぶ。

体中から溢れる光が拡散して魔法を打ち消していく。

魔法は私に届かない。

「私は……」

ジカルマさんの方を見る。
頷いた。

やってしまえ。

そう言わんばかりの不敵な笑みで。

「私たちはっ！！」

掌に魔力を集中させる。

明るい球体で敵を狙う。

「勇者軍団アセトアルデヒド！！世界は私たちが変える！！！！」

球体を放つ。

途中で小さな球体へと分れていき、敵を狙う。

その魔法は私の意思。

攻撃でも、拒絶でもない。

自分を相手の中に残す。

相手に影響を与える。

そういう思い。

球体はそれぞれ狙いを定めた敵を追尾し、加速し、命中する。

それは、相手の体に埋め込まれた。

私の意思を、相手に埋め込む。

相手の中に、私が流れ込む。

敵は次々に倒れていく。

戦意を喪失したからだ。

敵はいなくなった。

それが、私たちの勝利だった。

第十三話：変化

街が変わっていた。

破壊された建物が可愛らしくなって復活している。

「うおおおっ!？」

ぬいぐるみが歩いている。

「世界の人間を変えれば、世界の主も変わるわ。世界の主が変われば世界も変わるから、当然の結果ね。……しかし、あなた高校生でこれは……」

「いやー！私の頭の中まるわかりー!」

お菓子屋さんがある。

服屋がある。

そしてお菓子屋さんにお菓子さんがあり、その隣にはケーキ屋さんが存在している。

「女の子って怖い!」

なぜか恐怖を感じた。

「なぜ恐怖するんですか」

「おっ、エローンなお店発見」

「ない、そんなものないっ」

いや、ありますよ？

「ほら、そこに」

「ないです」

「どう見たってぐふふなお店っすよ？」

「幻覚ね」

「はい!？」

幻覚だと!？

そんな!

くつくつく、口ではああと言いながら――
つていう展開じゃないの!？

「なんてことだ、おそろべし」

それでも何か。

こう、やつにとって恥の塊であるような店はないのか。
きゃー、お嫁に行けなくなっちゃいます!。

つていうような店が物影に隠れてひっそり営業中なはずだ!
探す。

「おや?」

飾り付けが多彩な他の店と違い、可愛げのない店を発見した。

目立たない看板からはまるで、お店ではないですよ、と言いたげな
空気すら感じる。

「ここだな……」

入る。

「ククク!お前の頭の中の恥をご堪能してやるー!っ!」

金槌シヨップだった。
ありえない。
眩暈がする。

「落ち着け……まだ俺はセクシャルしてない……ハラスメントじゃないんだ」

がくがく。

頭が全く働かない。
倒れそうになる。

うう。

早く出なければ。

「……どうしたんです？ 顔色が悪いですよ？」
「オマエハオレノテキダーッ！」
「きゃー！？」

気がついたら金槌で叩かれて気絶してました。

これはある人間が作り出した
架空の世界の話。

これは架空の世界で
旅をする勇者たちの話。

これは旅をする勇者たちの
戦いの話。

これはその戦いの
記録。

彼らは名乗る。

勇者軍団アセトアルデヒドと。

彼らは、メンバーの一人であるユミの魔法によって彼女らしさが前面に出た街で、休息をとっていた。

露天風呂である。

彼女らしさが出たその風呂は美容などに効き目があるらしい。

即決だ。

もはや旅などどうでもいいと言わんばかりに、その温泉での滞在が決定した。

二泊する予定らしい。

「じくらくー」

女風呂。

それは男にとって覗いてみたい場所である。

しかし、ジカルマはもう寝ている。

ジカルマはもう寝ているのです。健全なる紳士のみなさん。

ここで念を押してみなさんに把握していただきたいことは、寝ている彼にとって、女風呂を覗くだなんてことは生きながらにして天国の花畑を見ることに匹敵するほどに不可能であるということなのです。

ですから、ここで二人の女性が一糸まとわぬ姿で存在している、その光景を彼はたとえどんな優れた美術家であつたとしても記録することはおろか、記憶することもできないのです。

当然のことでしょう。知覚できないのですから。

そう、知覚していないのですよ。紳士のみなさん。

彼は金槌のことも頭の中から放り出して、安らかに眠っているのです！

この夜だけは、少なくとも彼は安全であるはずであり、安全でなくてはならないのです！

「胸が大きくなる温泉とかないんですかねー」

お、おおおお！

ひっひー！ひっひー！

んぬー！んぬー！！

ナイム！ネナー！！イムネー！！

ハナチブー！！

やばい、やばいですよ。

これは映像メディアじゃなくてよかったですよ。

DVD修正版じゃないと見ることができない映像ですっつー！！

「これは、やばい。やばすぎるぞー」

「あなたの命がね」

真後ろから冷たい冷たい声。

まるで背中に氷を入れられたみたいだ。

「ひいひい！？」

「このクソ弟が……」

「ぼぼぼ、ぼくジカルマじゃないよよよ」

「今回はあなたの視線で進行する回なのでしょうがっー！！」

蹴り、いただきました。

天国のお花畑、ちょっとだけ、見れました。

ぼくたちーわたしたちはーきょう、はばたきますー！。

「どこにだよっー！」

目覚めると、真っ暗な部屋で寝ていた。

随分長いこと気絶していたようだ。

「ぬう……」

二人はもう寝てしまったのだろうか。

部屋、別だからわからん。

ちよっと待てよ？

二人が仮に寝ていると仮定する。

寝ているときは無防備だ。

さすがに寝ているときに金槌を正確に振り回せるはずがない。

ということは、今がチャンス……？

そして、どちらかが妊娠するのだ。

しかし、俺が治療方法のない病気にかってしまい、衰弱していくのである。

死を目前にどんどん近付く二人の距離。

必然として待ち構える俺の死。

一人残されて、まるで世界から孤独になってしまったような、そんな空っぽな感情が立ち込める。

だけど大丈夫。

私はこの子供を産む。

そして彼の、ジカルマの分も頑張って生きるのだ。
完。

「ちよー泣ける」

「どこがだよ」

一人でボケとツツコミをする。

後はこれで大爆笑してくれる良い人間がいたら夜通しで笑い飛ばせたのだろう。

でも一人だと空しいので寝た。

「おやすみー」

「うん、おやすみー」

「また明日な」

「おう、また明日」

一人芝居を十分くらい続けてから寝た。

その日、俺はユミとサキさんから襲われる夢を見た。

普通の意味で襲われた。

殺されかけた。

わけのわからない力で、体を食いちぎられそうになる。
そんな夢だった。

第十四話：敵

もしもこの街がユミによって変化したように。

俺の力で何かを変化させたら、どのようになるのだろう？

ケーキ屋とかはまずないだろう。

セクハラ専門店みたいなものはできるかもしれない。

あとは……。

やはり、他の街とあまり変わらないのだろう。

本質的にはこの世界と俺は同一人物だ。

「かああわああれえええ！！」

金槌屋を思いきり殴る。

そして、拳から壁へ魔力を思いきり注ぎ込む。

さあ、どうなる。

全く別の建物に変わるか？

建物が跡形もなく消えるか？

「うぐぐ」

これでもか、というくらい時間を使って魔力を注入する。

何になったらいいだろうか。

やはり、セクハラに役立つ道具が売っている店ができてほしい。

これまでより高精度のセクハラをするのだ。

他人より優れたことをするのは勇者として当然であるだろうし、他人には想像もできないような、そう、「想像を絶する！」なんてことを口走らせるようなことをしてみせてこそ英雄として認められるわけである。

それを補助するための道具というのは必然的に必要なものであって、

勇者にはそういうスペシャルなアイテムがつきものである。

「でりゃあああああ！」

拳を離して飛び退く。

バク宙（↑意味ない）。

そして、着地。砂煙が立ち込める（↑でも意味ない）。

視線を上へ向け、目を光らせる（↑限りなく意味がない）。

「ええええええ！？」

変化なしだった。

そこには金槌屋。

中に入れば金槌。

なぜだ。

あいつらにできて俺にできないなんて何事だっ！

とてつもない劣等感。

溢れだす劣情。

……なぜそうなる。

「けっ、女性が強いつてか」

前かがみになって、体を大きく横に揺らしながら歩く。

そういえば、図書館は無事かな。

大惨事になっていたから、ユミの影響を受けているのだろうけど。

例えば、日記。

あれは今となっては色々なことを理解するにはもってこいなアイテムだろう。

他にも世界がどういうものかわかった今では重要な意味を持つものはあるはず。

そこらへんのキーポイントは残っていないとまずい。

「ぬっ」

本屋になっていた。

諦めるな俺。

まだ本屋なんだから、本はある。

中に入る。

男が二人で抱きあっている絵が視界に飛び込んできた。

半裸。

半裸です。

「ぐふう」

挫折してもいいですか。

というより、女性でもこの絵はきついだろ。

趣味の世界は不思議に満ちている。

今日は、謎に包まれたユミの趣味をご紹介します——
不思議を発見し放題。そんなにおいがした。

「うげ」

「ぎゃー」

「ひiiiiiiii」

「うっ」

「あああああ」

「きゃああああ」

全部俺の悲鳴である。

所々、人間の趣味とは思えないものもありました。

世界よ、安心してくれ。

もつとおかしい人はいっぱいいます。
ぐっ。

心の中で親指を立てて、不敵に笑った。
誰に投げかけたメッセージかは自分でも不明だが。

「それはともかく、日記。日記を」

探す気にはなれないが。

一冊ずつ、確かめていく。
地獄だ。

例え一見まるで関係なさそうなものでも、重要だったりするかもしれない。

俺はそう思いつつ、ゾンビの眼球の写真を眺める。

そう、ゾンビの眼球。

ここから連想するメッセージが何かを解決するヒントになったりするかもしれない。

見つめる。

ちよつと、眼球が動いた気がする。

いやまさか。

紙だぞ？

いくらこれがどんな呪いのかけられている書物であったところで、
そんな超常現象は起きないだろう。

うごごご。

……動いてるなあ。
不思議だ。

こんな不思議な本だ。

きつと重要なアイテムに……

この世界にとって有益なヒントに……

「ならねーよ!!」

叫ぶ。

ただのユミの趣味だ、これは。
日記だ日記。

とにかく日記を探そう。

「……」

結局、見つからなかった。

見つけなくてもいいものを見つけてしまった。
理解しなくてもいいものを理解してしまった。

僕は、僕は……。
ぐすん。

「どうしたんですか？ 泣いてて？」

「男だろうと関係ない。僕は君を欲しいんだ」

「つつつ！？」

「君のどんな部分だろうと、僕は愛しているんだよ」

「ななな、なぜそれををを！？」

「ふ、ふふ、ふふふふ」

ユミと楽しく会話した。

スーパー拒絶魔女を発見。

質問に対する回答が得られそうなのはこの人だけである。
おかげさまで有力な資料もないしな。

「なあ」

「なに」

「魔王を倒したら、この世界の主はどうなるんだ？」

「……」

黙りこむ。

やがて、口にしたのは

「どうなると思う？」

疑問文で返された。

考える、ということか。

「魔王は、一番魔力が強いんだろ。ってことは魔王はこの世界の中
心人物ってことになる。それが倒されるってことは、この世界の主
に精神的にただならぬダメージがくるんじゃないのか？」

「……まあ、そのような感じだけね」

ナイス俺の推理。

「ただならぬダメージでは済まないでしょうね」

「……はい？」

「おそらく、人間の抜け殻と言わなければならないのだと思うわ。こ
の世界の人間で試したらそんな感じだったから」

「な、な」

なんだってー！！

魔王さんめちゃんこ重要な立場でいらっしやりすぎではございすぎ
ませんか。

「だから、代わりにあなたを魔王にしてある程度安定させるつもり

ではいるわ」

「なんと」

「それだけ大量の魔力を早く持てるようになっていただきたいと思う次第でございます」

「ぜぜ、善処しまふ」

つまり。

魔王を倒すと主が人間の抜け殻になる。

それを防ぐには誰かが代わりの魔王になる必要があつて、俺がその候補。

ということか。

話が単純で助かる。

「ただ、あなたはもつと頑張る必要があるわ」

「え？」

「私がこの世界のものを消し、彼女はこの世界のものを変化させる。

それは、それだけ本来のあなたが欠けるといふことよ」

それは、俺と彼女たちが敵であるという宣言だった。

第十五話：弟

サキさんいわく。

彼女たちの魔法は本来の俺を欠けさせるものであるそうだ。

彼女たちが魔法を乱用したときのことを考えれば理解はたやすい。

この世界の全てがサキさんの思うがままに破壊され、ユミの思うように変化したら。

そこに俺はない。

正確には、この世界の主であって俺の主であってイコールで結ばれる、そんな人間の本来の姿がなくなる、というところか。

そのようなことを起こすわけにはいかない。

と、そこにユミを発見した。

「禁止だ」

「はい？」

「今後一切、魔法の使用を禁止する仕様にしよう」

「しーしーしーしー？」

「うむ」

「わけわからんです」

しょうがないので説明する。

「はー」

「そついうわけで禁止」

「でも、禁止したらきつくはないですかね」

「む」

「一人で勝てるおつもりで？」

「うぐ」

割と俺以外の力で勝利している勇者軍団アセトアルデヒドであった。最近、俺より強いやつがわんさか襲ってくるんですもん。

「まあ、自重はしますけどー」

「ふふ。無力で他人の行動も制限できない俺……。ふっ」

「自嘲されてますか」

「最近、ダジャレにはまったりしている」

「寒いので死んでください」

ダジャレ。

それは手ごろに製造できるジョークであるが失敗すると死と直面しなくてはならない諸刃の剣なのである。

「あー、ところでさ」

「はい？」

「君たちの元いた世界は、あれなのか。この世界の主もその世界の人だったりしちゃうのか」

「たぶんそうだと思います。ほら、サキさんの弟なのでしょう？」

「へ？」

「ほら、ジカルマさんのこと弟って言うてらしたので、それはつまりその世界の主さんがサキさんの弟ということになりません？」

「なんと」

「だから、サキさんはお姉さんなんですねー」

「キンシンソーカンツ!？」

「よくそんないろいろな方面で危険な香りのする驚き方ができますねー」

弟アンド姉。

姉。

なんかいい響きだな。

姉。

姉。

拒絶上手の姉。

なんか売れそうな感じた。

……ん？

「弟を拒絶する姉って何事よ？」

「あー」

「何か悪いことをしたのかね、弟君は」

「あんたがその弟君でもあるわけですが、まあ、こんなわけのわからない世界に引きずり込まれればいくら弟でも拒絶くらいされるでしょうねー」

難儀だな、世界。

同情してやるよ。

……自分自身に同情してどうするよ。

いかんいかん。

最近一人でボケとツツコミをやる機会が増えてきた気がする。

せっかくの勇者軍団の意味がない。

そう、ボケとツツコミは別々の人間がやってこそだ。

というわけで。

「いざ、ボケタイム」

シャキーン。

相変わらず白でした。

……白マニア？

金槌が見える。

短剣で受け止める。

「ぬぬぬ」

「ふっふっふ」

いつまでもワンパターンで負ける俺ではない！

ワンパターンな芸風というのは、たとえそのフレーズが流行したところでもその次の年には存在が非常に薄くなるということは明々白々であり、その悪しき流れに甘んじるわけにはいけないのである。

そこで、追加攻撃！

めくる。

めくる。

もみもみ。

めくる。

もみもみ。

もみもみ。

6COMBO！

「きゃいーっ！」

ケイ、オーツ！

ばたり。

あまりのショックで気絶したようだ。

「ユミ。これで君の魔力はもう使う必要がないと証明された」

かつこよく去る（放置したまま）。

急いで戻る（放置してたのに気付いて）。

困る（放置しておくべき？）。

とりあえず、手頃な日陰に運ぶ。

そして目覚めるまで待つ。

「うつ……」

「目覚めたか。ツッコミ役」

「な、なんのことですか、それ」

「それはともかくだ」

念を押しておく。

「魔法の使用は控えるように」

「寒いダジャレ……死んでしまえ……」

「いや、今のダジャレの部分ないし!!」

「あれ、そうでした?でもとりあえず」

「それはそうと、ところでだね」

次に何を言われるか読めたので、話題を変える。
とりあえずで死んでたまるか!

「もしかして、君たちの元いた世界はこの世界の主がいる世界と同一なのか?」

「それ、さっきも言ってた」

「あれ?」

まじで?

「少し間を空けただけでこれですか」

「は、はい?」

間?

「ネタ切れ及び執筆意欲の低下によって創作活動を停止し怠惰な人

間としての生活を少し送ったくらいで直前の会話すら忘れるとは頭がいかにれているのいいところですね。プロットを今更仕上げたところで、以前の伏線や設定を全て忘れてしまっている役立たずの腐った食品に相当する程度の人間なのではないのかと懸念しなくてはならないと確信しております」

「ただだ、誰に言っているんだそれは！！」

「安心してください、ジカルマさんには言っていないですから」

「なおさら誰に言っているか疑問じゃない！！！」

「とつとと終わってしまえ、色々とー」

ものすごくやけになっていないか？

終わるってなにが？

「誰に言ってる……」

「というわけで、魔王をちゃちゃっつと倒しましょう！」

「どつというわけか教えてくれ」

「いや、無理です。モニターごしでないと理解できない事情なのです」

モニター？

「わけわからん」

「わからんでいいんで、とつとと向いませう」

そう腕を引つ張られる。

つて、魔王つて！？

「無理無理無理！勝てない勝てない！」

「私の魔法でなんとか」

「それだめ！世界の主さんの精神が壊れちゃうー！」

「次回作にご期待ください！」

「よくわからない言葉で誤魔化してもだめっす！」

しかし、なぜかその後多数決により魔王を倒すことに決定してしまった。

第十六話：ごり押し

魔王がいる城。

そこに向かう。

城には魔王がいる。

だから、魔王を保護しようとするやつが集まる。

気配はあった。

だが襲いかかつてはこなかった。

無視して進んだ。

こちらとしても戦いは避けたかった。

そして、今、囲まれている。

「魔法は使わんでくれ、頼むから」

「身を守る程度ならいいでしょう?」

「そりゃ、まあ……」

「ジェノサーイツ!!」

「殺戮はやめてー!?!」

余裕があるわけではないが漫才はできた。

向こうが慎重すぎるのだ。

襲いかかる気配はない。

このまま引けば何もしない、ということか。

「引けば安全なんだが。襲いかかつてはこないだろうから」

「便利な通訳っすねー」

「同一人物だからな」

引くべきだ。

そう言っつて、引こうとしたのだが。

それより早くサキさんが一步踏み出した。

「行くわよ」

「ちょ……!?!」

「殺さなければ、いいのでしょうか?」

そう自身ありげに前へ進もうとしたのだが。

敵の刃物が襲いかかった。

間一髪のところまで避けていた。

「殺すわ」

「だめだ」

「なんで」

「困ったらとりあえず戦闘をして、それでテンポをとりつつ敵から新しい情報を得て新しい目標を定めてまたそこで戦闘をしていくというありがちな展開はよくないと思うんだ。そういうのはロールプレイングなゲームでやっていけばいいと思う」

「私に向けて言っているように感じないのはなぜかしら」

「さあ?」

おまけに殺されるのは俺だし。

正確には俺の主体であるこの世界をつくった人間の一部であるのだが。

日本語って難しい。

「とりあえず、殺すわ」

「あーあーあー」

サキさんは手から、真黒なレーザーを打ち出した。
そこまでできるんですか、あなた。

しかし。

拒絶の魔法を受けた敵たちは全くもって平気であるようだった。

「おいおい、手を抜くなよ」

「逃げましょ」

「はあ？」

いきなりなんだ。

「拒絶されて傷つくというのは、相手に対して好感を持っているからでしょう？」

「いきなり何の話だ」

「じゃあ、拒絶されている相手のことをなんとも思ってたなかったら？」

「どうとも思わないだろ」

「つまり、私の愚かな弟は私に拒絶されるあまり、姉である私をどうでもいいと認識しているのよ」

「姉も大変だな」

とりあえず、逃げよう。

囲まれているけど、どうにかして逃げよう。

そんなところに、魔法が飛んできた。

炎の球体が向かってくる。

対処することはできない。

反射的に体が動いた。

それを手で受け止める。

「ぐおっ」

敵対の意思。

攻撃の意思。

その他いろいろ。

決して、良い感情ではない、黒い部分が脳に伝わる。
それが、少しずつ言語として解釈されていく。

「お前らは我らの敵。ここで殺す」

そんな感じだった。

「なんか、意思が伝わるんだが」

魔法は意思であるとは知っていたが。
ここまではつきりと掴めるものなのか。

「逃がしてもらえないんですかねー？」
「どうだろう。聞いてみる」

ぽーん。

水の塊を投げる。

これを相手が受け止めれば。

……。

……。

避けられた。

「話す気はない、と」

「そもそも魔法で話す必要ねーです」

「逃がしやがれ！こんちくしょう！」

魔法。

刃物。

刃物。

魔法。

次々に飛んでくる。

どれを避けて、どれを受ければいいのか。
混乱してくる。

「ところで、質問があるのですが」

ユミが拳手する。

そんな場合じゃなかるうに。

「なんだ」

「どうして伏線もなしに変な能力を身につけられたんですか？」

「質問の意味がわからないな」

「……出来の悪い後付けなのか」

ぼそりと何か聞こえた。

悪口っぽい感じだった。

しかし、まあ。

見事に囲まれている。

囲まれているとしか言いようがない。

「囲まれて逃げれない、絶体絶命〜って、なんかであったよな」
「なにを突然」

サキさんが目を細める。

頭がおかしくなったの？

と、脳内でサキさんの声がした。

頼むから先入観まで俺をいじめないでくれ。

「いや、死ぬ前に言いたいことは言っておいた方がいいかなって」
「言っておくけれど、こういう状況は体験済みよ」
「そうだったけ？」

そういえば前にもあったな。

「つまり、この後俺たちは世界の一部として吸収されてゲームオーバーか」

「冗談が過ぎると殺すわよ。なんとかしなさい」

「そういうセリフはユミに言うべき」

「や、無理っす」

何かいい手はないだろうか。

そういう時、思いつけてしまうのが勇者なのだ。

英雄なのだ。

なので俺は英雄だ。

誰か褒めてくれ。

「なあ、前は世界に取り込まれそうになったよな」

「だからどうしたって言うのよ」

「今度は世界からはじき出されて元の世界へ帰還したらクールじゃないか？」

「は？」

「前は魔法でピンチになったけど、今度は魔法で救われるってわけよ」

「意味がわからないのだけれど」

「そして前回魔法を使ったのは敵！ならば今回魔法を使うのは味方である俺！」

女性陣置いてけぼり展開。

だが、それでいいのだ。

彼女らは、頭で知識を得るよりも体で体験して知ってここまで来たのだ。

今更、何らかの不思議パワーで宇宙が爆発しようがなんでもないのだ。たぶん。

ところで、体で知るって、なんか興奮する言い回しだね。と、ここまで適当にまとめておいて、だ。

「一度起きたことを基にして、多少の改変を加えて何らかの事象を起こせば、その事象は改変に沿いつつも基にされた事象と同様に進行するのだ!!」

それは例えば、人間に向けられたユミの魔法を街に向けた場合のよ
うに、だ。

そして、今回を以前と同様に、なおかつ所々を逆転させて進めた場
合。

行きつく先は。

「あばよ女性陣！元の世界に戻れ！そして——」

魔法を放つ。

光が二人を巻き込んで天へと飛んでいく。
そして。

「——勇者軍団アセトアルデヒドは解散だ」

俺は一人になった。

第十七話：「魔女」

よくわからなかった。

気付いたら、朝だった。

これまでの朝とは違う。

いつも通りの朝だ。

私は、山辺由美。

そういう名前。

変な夢を見たのであった。

夢の中で何日も過ごした。

まさか、こっちでも何日も過ぎてるってことは……。

携帯で確認。

無事。

よかった。

とはいえ、夏休み入りたてである。

数日くらい過ぎていたってかまわないのだ。

それで。

そう、夢。

セクハラを生業とする勇者と旅をする夢だった。

あれ？

勇者が生業でセクハラは趣味が正確？

まあ、いいや。

どっちでもそれほど差はないから。

とにかく、旅をしたのだ。

そう。

ゲームみたいに旅をするのだ。

でも、モンスターは全然出てこなかった気がする。

全体的におかしかったが、世界観がおかしかっただけで、割と筋の通っている夢だった。

確か、誰かの世界で、その誰かを基に人間とかできていて。
魔法は意思だっけ？

それにしても、壮大な夢だったなあ。

刃物とか、血とか。

人が死ぬのをたくさん見た。

ゲロに苦しんだ。

……嫌な夢じゃん。

それと、何よりセクハラされまくった。

夢の中でセクハラされまくるとか……。

私の脳みそ、終わってる……。

泣きたい。

それで、なんだかわけのわからない終わり方をした。

あれは、私が魔法の力に目覚めた時との対比？

世界に潜りこむのと、世界から抜け出すのと。

うまくできた夢だ。

だが、夢オチである。

結局伏線回収できずに夢オチに頼るようじゃ、ちょっとあれだよな。

それにしても、リアルな夢だった。

感覚的に、というか。

うーん。

……夢だよな？

朝食を食べ終わる。

学校へ行こう。

……行かなくていいじゃん。

夏休みだったの。

寝ようかな。

いや、それもなんだかなあ。

夢で旅をしていたせいだ。

動かないと落ち着かない。

断じて精神的な病ではない。

外に出よう。

適当に身支度して、靴を履く。

うーん。

何かが足りない。

物足りない、というか。

やっぱり、夢じゃなかったのかなあ。

一旦戻って、金槌を持ってみる。

セクハラ魔撃退武器である。

落ち着く。

うわー。

私、今、女子高生としてかなり危ない。

こんなおかしい頭してたらイエローピーポーに運ばれてしまう。

まあ、とりあえず。

どこかに行こう。

勢いよくドアを開けて外に飛び出す。

「しまった……」

ごくごく自然に金槌を持ったままだった。

「施設入りが近いなあ」

朝から涙目。

金槌は仕方なく持っていくことにする。

鞆の中に入れた。

とりあえず、だ。

もし、あれが夢じゃなかったら？

夢じゃないとしたら、どこかにあの世界の主がいる。

それと、その姉が、サキさんだ。
どちらかを発見することができれば、わかる。
いやはや。

しかしまあ、なんで自分がこんなに夢に必死になっているのやら。
冷静に考えれば馬鹿らしいのだけれど、なぜか気になる。
何事もなければそれでよしなのだけれど。

例えば。

クラスの中にあの世界の主がいたとしたら？

確か、そいつはひきこもりだったはず。

それと、不登校。

とすると、クラスの中で不登校のやつだったりするのだろうか。

丁度一人いたりする。

そうだったら困る。

とにかく、そいつは不登校。

つまり、接触する機会はずゼロ。

どうしよう。

考えながら歩く。

風景が変わっていくだけで、頭ではそれ以降進展がない。

やがて。

とりあえず、どこに向かうかだけは考えないといけないなあ。

なんて迷っているうちに、学校まで来ていた。

普段いつもここまで来ているせいかな。

無意識というものは恐ろしい。

と、そこに。

校門の前に立っている女性を発見した。

女性が校門の前に立っていたところで、気にもならないはずだが、
そうはならなかった。

見たことがある人だった。

マジですか！。

そう心の中で叫んだ。

あれは夢じゃなかったのか。

本当に異世界にいたのか。

異世界で私はセクハラを受けまくっていたのか。

その証拠がそこにいる女性だ。

彼女とは、その異世界で出会った。

そこで見た彼女そのままの人間がそこにはいる。

だが、何かが欠けている気がする。

「魔法の力が無い分、人の心が読みにくいでしょう？。」

女性が話しかけてきて気付いた。

他人を拒絶するような刺々しさが薄れている。

違う。

彼女が言った理由でもって、そう感じるのだ。

彼女の名前は、竹原紗希というようだ。

家は、豪華だった。

当社比ではあるが。

広い。

部屋がたくさんあった。

それなりに裕福であると、はしゃぐ私に対して言っていた。

裕福は、ひきこもりを生むのだ。

そう彼女は自嘲気味に話した。

「そういえば、弟さんは？」

「ああ、相変わらずひきこもっているわ」

「名前はジカルマって言うのですか？」

「まさか」

紗希さんはそう言いながら笑った。

「普通すぎて面白くないわ。優しく太いと書いて、読み方もひねってないもの」

「やさぶと？」

「……とりあえずボケようとしていない？あなた」

「スカートめくり要員がいない今、私しかボケがいないのです」

「別に日常会話にボケツツコミはいらなと思うのだけれど……」

出された紅茶を飲む。

うわ、うま。

やはり裕福は違う。

……いや、何飲んでもうまいって言える自信がある庶民の舌の持ち主ですが、私は。

「まー、とりあえずですね。聞きたいことがいくつかあります」

そう言って、本題へ移った。

第十八話：「弟」

「あの世界は夢ではないのですか？」

一番気になることだった。

あれは夢なのか。

夢でないのか。

夢でないとして、なぜあちらでかなりの時間が経ったのにこちらでは一晩の出来事なのか。

ご都合主義なのか。

「夢かどうかは微妙なところね」

少し唸りながら紗希さんは言った。

「少なくとも、関わった人間への影響はあるわ。特に私の弟に」

「と言うと？」

「例えば、私たちは向こうの世界で出会ったわ。もし、向こうが普通の夢であるならば、あなたがここにいることはあり得ないわ。しかし、夢であったとしても、お互いに交信、というか、交流ができるようなものであったら？」

「でも、もしかしたらお互いに同じ夢を見ただけかもしれないじゃないですか」

「そうね。せめて、別れ際にこっちのどこで集合するかななどを打ち合わせしておけば現実味が増す話だったわね」

「優太さんの方が影響が強いつていうのは？」

「ああ、そうね」

そっちの方がわかりやすいか。

そう紗希さんは納得した。

「じゃあ、部屋に乗り込みましょう」

「え？」

「ああ、今金槌を持ってくるわ」

そう言って立ち上がった。

私も慌てて立ちあがりながら鞆の中に手を突っ込む。

「あ、それなら大丈夫です。持ってますから、金槌」

取り出して見せる。

紗希さんはきよとん、としていた。

しかし、次の瞬間、彼女は頭を下げた。

「弟のせいで変な癖をつけてしまったようで、申し訳ないわ」
「い、いや、いいんです。とりあえず、行きましょう」

紗希さんの後ろを着いていく。

そして、優太さんの部屋とやらの前まで来る。

家の端の方で、部屋の位置から既にひきこもりだ、と思った。
紗希さんがノックする。

返事はない。

もう一度ノックするかと思いきや、紗希さんはドアを蹴った。
開いたドアの向こうにいる男性から、足でドアを開けた女性の姿が
浮き彫りとなった。

男性は非常に驚いていた。

私も驚いていた。

そして、男性の視線は見知らぬ女子高生である私へと移った。
のだが。

「ひ、ひい」

怯えられた。

「なんか、私、怖い人なのでしょうか？」

「そりゃあ、怖いでしょう」

そう言った紗希さんの視線を辿る。

金槌。

ああ、なるほど。

「で、私は金槌で叩けばいいんですか？股間を」

「そうね。そうしたければそうするといいわ」

「では」

私は部屋の中に入った。

目で目標を中心に、腕や足などの動きに注意しつつ接近する。

「ひいひい」

物凄く怯えている。

涙目だ。

まだ殴っていないのに。

「てやー」

振り上げる。

「いぎゃあああああー！」

まるで今にも殺されようとしている人間のような悲鳴だった。
いや、確かに命に支障が出るかもしれない攻撃だけど。

「しかし、怯えてますねー」

「あなたがそうしたのよ」

「私が？」

「金槌に対する恐怖心、それはあなたがあの世界で彼に植え付けた
価値観よ」

「そうなのですか」

「あなたは魔法で自分の価値観を植え付けることもしたけれど、魔
法無しでも随分とやっているのよ」

「あははー」

「おそらく、今の彼はあなたの影響でもって、B Lなども多少はた
しなむ人間になっているわ」

「うごあ」

自重するべきでした。

「だから、ただの夢ではないし、そこでの出来事が直接彼に関わっ
てきているのよ」

「はー」

嫌な実感の仕方だなあ、と思う。
はらり。

「はひ？」

視線を下方へスライド。

スカートがめくられているのを確認。

誰が？

……男性。

名称、確か優太。

……。

……。

天使のような微笑みを彼に投げかけてあげた。

その後、処理した。

その後、しばらくしてから家に帰った。
寝転がる。

「あー」

適当に声を発する。

「うー」

発する。

「あー」

金槌で悪をこらしめた後である。

再び紗希さんと話をしていた。

その時、私は聞いた。

「また、あつちに連れ戻されたりします？」

今、ここにいるのは半ば無理やり追い出されたからだ。

だから、もしかしたらまたあつちに行くことになってしまつかもし

れない。

「わからないわ」

紗希さんはそう答えた。

「でも、彼にとって、優太にとってまだ私たちがあの世界で何かすることが必要であるのならば、戻されるでしょうね」

それは、戻される可能性が大にあるということの意味していた。むしろ、戻されることを前提に構えていた方がいいだろう。

戻されて、何をすればいいのか。

今度はそれが課題だ。

彼にとって私たちがあの世界で必要のない存在であれば向こうへ戻されない。

ならば、あの世界で必要のない存在になればあっちから帰ってくることができる。

そういうこともあるはずだ。

魔王を倒す。

そうすればいいのだろうか？

そもそも、私たちはどうしてあの世界へ連れてこられたのだろうか？何を期待されているのだろうか？

魔王を倒すための力？

それとも別の何か？

それは一体何？

わからない。

わからないまま、睡魔が襲ってきた。

そうだ。

向こうで考えよう。

私はそう結論して、睡魔に身を委ねた。

第十九話：語りかけ

勇者、英雄というものは憧れの対象だ。

だからこそ、そんな呼ばれ方をするのだ。

刃の長い、豪華な、それらしい剣を俺は持っている。
手に入れた。

深い深い洞窟の奥。

大事に守ってありますよと言わんばかりの位置にあったそれを抜き取った。

何かしらの伝説があるらしい剣とのことだが、どうでもいい。
振るべき者が振るわれるべき剣を使えばそれで十分なのだ。

俺は勇者なのだから。

身なりもそれらしくした。

かつこいい、というイメージをそれなりに放出する。

それでいて清楚である。

値段だつて口にすれば人を驚かすことができる。

身につけている布が風になびけば、そこそこの絵になるだろう。

俺は英雄になるのだから。

悪の群れが街に押し掛けてきたのであれば、それを一つ残らず街から消し去ろう。

巨悪がどこかに根を張って待ち受けているのであれば、地の底の底にまで及ぶそれを焼き払ってやる。

お姫様が囚われてしまったのならば、見事に救いだしてみせよう。

どれもやったことがある。

俺はどれもやったぞ。

一人でだ。

仲間はいこれ以上いなかったから、一人でやった。

最初に最後に挙げたことをやった。

俺はそれしかできない弱者だったから。

自分一人でないと命からがらなど夢のまた夢だったから。
それから。

俺は強くなった。

一番目も二番目も容易く何度も幾度も何千度もこなせるように、
だ。
強さに見合うだけの血を見た。

流したし、流させた。

己からも敵からも噴き出た。

しかし、何万度やったところで立っているのは俺だ。

倒れるのは向こうだ。

それが強さだ。

そういう強さを、俺はあれから手に入れたんだ。

「さあ、今度こそ倒すぞ。魔王を」

今、俺は魔王よりも強い。

強いが、それを事実にしなくてはならない。

100%勝てる。ではだめなのだ。

勝っている。でなくては。

敗北という事実を突き付けてやらねば、中途半端な強者は屈しない
のだ。

「さらばだ、強かった俺。強い俺の前に屈するがいい」

適当にかつこよさげな事を言っておく。

こういうことの積み重ねが人の心を掴むのだ。

大事。

特に他人と関わる人間には。

対峙。

魔王を睨む。

ついでに、今の大事と対峙で冷やかな視線を送られたのでそちらも

睨んでおく。

そして、駆け出す。

だが、奇跡へ飛び込まないし、見上げないし、光へ手を振らないし、ましてや止まらない気持ちを繋いで行くわけでもなく。剣を振るう。

一対一だが、魔王は弱い。

レベルが違うのだ。

こちらの攻撃で相手はダメージ。

向こうの攻撃は当たらない。

向こうが勇者であつたのならば、

「一方的すぎる……！」

などのセリフをいただけただろうが、残念だな、魔王よ。

お前はここでゲームオーバーでハッピーエンドなのだ。

クハハハハ。

踊れ踊れ！

豚のような悲鳴をあげる！

小僧から石を取り戻せ！

貴様に朝日は拝ませねえ！

死んでしまえ！

だが簡単には殺さない！

じわりじわりと――

はっ！？

なんか俺の方が悪者っぽくなってる！？

魔王は失神してた。

なんか、なかなか死なないね。

「しかし、まあ、これで済んだな」

失神しているのなら十分だ。

いつでも殺せる。

お別れの挨拶をしてから、殺せる。

この世界が必要なくなる前に、話ができる。

まー、そういうわけで。

この通り、もう他人は必要ないのだ。

この世界の主はこれで変わる。

城の中にひきこもる弱い魔王ではなく、俺が中心になるのだから、たぶん問題ない。

もし、世界の主が他人からの影響を期待して呼び込んだのであるならば、

もう十分すぎるほどに影響を受けた。

ただ己のことだけを考え、動く（主にスカートめくりをする）だけだった自分ですら、

他人のためにここまで一人で強くなるようになった。

人間とは、他人がいるから進歩するのだ。

他人の利のために。

他人から害を受けないために。

他人を押しつけて利益を自分のものにするために。

そのために進歩するのだ。

それを知れば。

それができるようになれば。

もう大丈夫だ。

だから、君たちはもうこの世界に必要ない。

魔王が動いた。

もう復活したのか。

しぶとい。

明らかに負けているのに、それでもなおひきこもるつもりか。

「仕方ないやつだな。引きこもれないようにしてやる」

魔王が逃げようとする。

抵抗？

変わることに恐れ？

でも、見逃しはしない。

すぐに追いつき、足を払う。

転倒したところで背中を思いきり踏みつけて、押さえつける。

「毒は毒を制することがあるそうだ。俺は最終的にお前の有害物質になれて嬉しいよ」

アセトアルデヒド。

有害物質だそうだ。

そう名乗ってしまったからには、こうやってそれっぽい言い訳で正当化するしかない。

正しいことをしても悪事は悪事なのである。

そついうことを噛みしめておこう。

「それじゃあ、さようなら」

違うんだな。

魔王に言ったんじゃないくて、君たちに言ったんだな、俺は。

そこで見ている二人に。

見ているだけでいることを俺から強要されたお嬢さん二人に。

この前は言う暇もなかったからな。

魔王を殺して、しばらくして彼女たちは消えた。

俺が一人でも魔王を倒せるほどにしっかりしていることを証明できたから。

必要なくなったのだ。

彼女たちは。

ついでにこの世界も。

元々、ここは彼女たちから影響を受けるための場だったのだから、もう必要ない。

消えるのだろうか？

まあ、消えなくても需要はどこにもないかな。

勇者軍団アセトアルデヒドの冒険は確実に完結したのだ。

第二十話：「架空勇者戦記アセトアルデヒド」

夏が終わった。

正確には、夏休みが終わった。

高校球児が野球で敗退して夏が終わるように、

私たちもまた、夏休みが明けることによって夏が終わるのである。

平凡な夏休みであつた。

要するに、甲子園優勝して夏が終わるような清々しい終わりではなかつた。

宿題もまだ残っている。

私たちにとって夏休みとは一体何なのだろうか。

なんてことを考えて鬱になってみたりもする。

せいぜい起こつた特異なことといえば。

あれだけだ。

冒険をした。

変な世界で。

今までにない夏の始まり方だつたな、と思う。

終わるのも早かつたが。

最後は特に酷かつた。

一旦こつちに帰ってきたのにまた連れ戻された。

と思つたら、向こうの世界で私たちと一緒に旅をしたやつはいつの間にかこんなのあるかよと言いたくなるくらいのパワーインフレをしてくれやがつていたのだ。

それで、魔王をそいつが一人で倒してくれちゃって、こつちは見ていただけだつたのだ。

何のために私たちはいたんだ、と思つた。

あれから、また紗希さんと会つた。

その不満をぶつけた。

そしたら彼女はこう言ったのだ。

「私たちは見届けるためにいたのよ」

彼は自分の成長を見てほしかったのだ。

自分が変わったということを誰かに知ってほしかったのだ。

だから私たちは連れ戻された。

そう彼女は語った。

弟に対する拒絶は薄れていたようだった。

だが、金槌を常備していたことに関しては、見ていなかったことにしたい。

まとめる。

私はなぜあの世界に連れてこられたのか？

彼を変えるためだ。

ひきこもりで不登校のダメ人間である彼は、変わることを望んだ。

他人から影響を受けることを望んだ。

そのために作られた世界で、それをするために私たちは呼ばれた。
迷惑な話だと思う。

しかも任務の中には、成長を見届けるという条件付きだったのだ。

この条件は酷いことに最後まで語られることがなかった。

私たちはなんやかんやで、強制労働させられていたのである。

これは問題になるぞ。

問題にしたいけれど、どうすればいいのかわからないぞ。
とことんたちが悪い。

このままでは無駄なボランティアをさせられた気分だ。

ポジティブな解釈をしよう。

理由はともあれ何もない夏休みの彩りとなるべく、壮大な冒険をし

たのだ。

これは小規模ながらも多少は偉大な記録なのだ。
ある人間が作りだした架空の世界で、旅をする勇者たちの戦いの記憶。

略して架空勇者戦記。

なんか、それっぽい。

戦記とか、そのあたり。

ただ、それだけだとインパクトにかける。

そうだ。

私たちは勇者軍団アセトアルデヒドとか名乗っていた。

調べてみたら、アセトアルデヒドは本当に酒に関する有害物質だった。

響きがいいだけじゃねえか、マジで。

と情報を得た時、低い声で呟いてしまった。

そう、それで。

それをくつつけよう。

架空勇者戦記アセトアルデヒド。

いいね。

わけのわからない響きだけのかつこよさがいい。

これなら。

こういうことにしておけば、有意義じゃなかったわけでもないように思える。

さて。

それはともかく。

夏が終わった。

終わったのだから、学校へ行かなくてはならない。

日常に戻るのだ。

私は架空の世界で勇者して戦記を残す人間ではもうないのだ。

優太とやらは学校に来るのだろうか。

来るんだろうな、たぶん。

以前会った時よりも酷いセクハラ魔になって。

丁度、ジカルマさんのようなセクハラ魔に。

もう勇者ではないけれど、

とりあえず、金槌は持っておいた方がよさそうだ。

第二十話：「架空勇者戦記アセトアルデヒド」（後書き）

以下あとがきです。

題してアセトアトガキ……

なにもうまくないので題さないでいきましょう。

この作品のカテゴリについて解説。

・異世界

我々から見た異世界、ではなく、少女たちから見て異世界が舞台、ということでした。

「そういう意味だったのだよ!」「な、なんだっry」というためだけに序盤では少女たちの世界について全然語られません。

優太関連とか伏線張れまくりなのに、こっちを取るあたりあれです。ギャグ重視です。

・涙

下ネタの多さに下ネタ苦手な人が。

・シリアス

たまにあつた気がしなくもない。

・コメディ

これメイン。超メイン。

というかこれが全て。

・ファンタジー

金槌でセクハラ魔を撃退するあたりがそうなんじゃないんですかね。

・冒険

作者もいろいろ冒険しました。

とみせかけて安全圏だと確信してやってます。えへ。

・魔法

もしかして余分な設定だったんじゃない？

まあいいや。

・架空戦記

戦記が架空なんじゃなくて、架空の舞台の戦記でした才チ。
だからなんだと言われればそれまでさ！

・R15

「これだけのためにR15に設定しましたー！ーっ！！（↑悲鳴）

└

スカートめくり+この悲鳴。それだけのためです。マジで。

こういうしょうもないネタにも全力を出して取り組むことができる。

そんな人間になりたかったんです（綺麗事っぽいけど綺麗じゃない）

。

そういうわけで下ネタが多かったりします。

最近ではそれが下ネタであるという認識が薄れています。危険。イ

エロピーポー呼ばれちゃう。

これだけがこの小説を書いた動機です。

むしろ、スカートめくり+悲鳴のためだけにこの小説が生まれたと
いっても過言ではないです。

あとがきといってもあれです。

ここまで見てくださった方には理解ができるとおり、ストーリーとか二の次です。

なので語ることがないのです。うわあ。

同時に反省点でもあり、次回は頑張りたいなあと思います。

それでは私の次回作に以下略。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699f/>

架空勇者戦記アセトアルデヒド

2010年10月15日18時33分発行